

国営伊那西部農業水利事業

—緊急発掘調査報告—

宮垣外・天庄Ⅱ・堀の内・小花岡遺跡

1980

伊那市教育委員会

関東農政局伊那西部農業水利事業所

伊那市史編纂委員会

82

国営伊那西部農業水利事業

—緊急発掘調査報告—

宮垣外・天庄II・堀の内・小花岡遺跡

1980

伊那市教育委員会

関東農政局伊那西部農業水利事業所

序

昭和54年度国営伊那西部農業水利事業（西部送水管西箕輪地区）の一環として、伊那市西箕輪中条にある宮垣外遺跡・天庄Ⅱ遺跡・堀の内遺跡・小花岡遺跡の発掘調査が行われました。

西箕輪地区は経ヶ岳山麓より広がる扇状地面の頂部附近に位置しています。したがって日当たりも良く、水の便も良いという二つの条件で遺跡も数多く発見されています。遺跡数の多い割には、発掘された遺跡はほんの数例でしかなかったが、今回の四遺跡の発掘によって、山麓地帯の古代文化解明に大きな役割りを果たすことと思います。

次に遺跡の成果について述べてみたいと思います。宮垣外遺跡では住居址6軒、竪穴6基、土塚13基、集石址1、集石土塚1、柱穴群1、天庄Ⅱ遺跡では住居址2、堀の内遺跡では堀址1、建造物址1、小花岡遺跡では住居址1、土塚2であった。

報告書刊行に当たって、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一同、この調査に御協力いただいた調査員の諸先生、並びに作業員一同、関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和55年3月4日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢 一雄

まえがき（宮垣外・天庄Ⅱ・堀の内・小花岡遺跡の環境）

位 置

宮垣外遺跡は長野県伊那市大字西箕輪上戸に、天庄Ⅱ・堀の内・小花岡遺跡は伊那市大字西箕輪中条に、御射山山麓より東へ押し出した山麓扇状地の扇頂部に位置している。遺跡地の現況は各種であった。宮垣外・小花岡遺跡は桑畑に、天庄Ⅱ遺跡は竹林、山林、原野に、堀の内遺跡は桑畑、山林にそれぞれ利用されていた。西方の押し出しは厚く、ローム層の上に各種様々の大きさの土砂が堆積していた。

遺跡の存在する地点は北から宮垣外遺跡、天庄Ⅱ遺跡、堀の内遺跡、小花岡遺跡と標高890～920 m前後の所に南北に順々に連なっている。

四つの遺跡に至るまでの経路は二つの場合が最も一般的な考え方である。一つとしては、国鉄飯田線伊那市駅を降りて、伊那市街地を経て西に向かって、大堂、荒井線を約3 kmほど通ると信州大学農学部白い学舎が左側に見える。さらに、西へ1 kmほど行くと、西箕輪小学校の校舎が見え、校舎より少し手前が四つ角となっている。この一帯は西箕輪の中心地で、農協、小学校、中学校、伊那市役所西箕輪支所等の公共の建物が建ち並んでいる。この四つ辻を右手に行くと、羽広に、左手に行くと、梨ノ木、上戸、中条を経て、与地に至る。四つの遺跡に行くには先に述べた地点より、左手に行かざるを得ない。四つ角より1.5 kmほど行くと伊那バス上戸停留所があり、ここを西側へ50 mほど入った一帯が宮垣外遺跡である。天庄Ⅱ遺跡は宮垣外遺跡と南側で接している。堀の内遺跡は伊那バス中条停留所のある近くの道路を西へ折れて、中条公民館の前を通りくねくねした道路を500 mほど行くと白鳥喜千子様宅があり、ここで立ち留って南側をみると大きな森が目に入る。このなかが堀の内遺跡である。遺跡の周辺にはわずかに畑もみられ、都会人の避暑の場である別荘が数軒立ち並んでいる。

小花岡遺跡は伊那バス南中条停留所(火の見のある所)附近を西へ折れて、1 kmほど登っていくと、山麓扇状地に数軒かたまって集落がみられる。これが花岡部落であり、遺跡地はその東側一帯に広がっている。

地形・地質

西箕輪は伊那市では名のごとく、西部地帯に位置し、集落のある地帯は割合に標高が高い。したがって、その眺望は最も優れた地帯と思われる。目を一回りしてみると、まず東側には赤石山脈の主峰の一つと考えられる仙丈ヶ岳、駒ヶ岳、その前には伊那山脈がみえ、これらの間に三峰川が東から南へ流れ、最終的には天竜川と合流する。天竜川はよく知られているように、諏訪湖にその源を発し、諏訪郡、上下伊那郡、愛知県、静岡県を延々二百数十 km 流れて、太平洋に注ぎ込んでいる。天竜川の起因による自然景観は複雑である。伊那市周辺では南北に細長い縦谷状地形、両岸に数段に

わたる河岸段丘を形成している。次に西箕輪地区に限定した地形・地質を述べてみよう。当地区の主峰はなんと言っても木曾山脈と違っている経ヶ岳が主であり、それに続くものとして、吹上山麓、藏鹿山麓、御射山山麓があり、山麓の傾斜度は割合に急である。したがって、この一帯から下にかけては大きな山麓扇状地を成し、土砂等の堆積が厚く覆っている。当地区の河川は北側から大泉川、大清水川・小沢川の三本だけであり、古来から住民は水の不足に悩まされた。そのために各所に溜池がつくれ、非常時に備えている。土地の利用状況は大部分が畑作にかぎられている。

歴史的環境

西箕輪地区は経ヶ岳山麓、標高760m位から1,000m附近までわたって各時代の遺跡が分布しているが、その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また、分布地域が、遺跡分布図を参考にすれば一目瞭然であるが、大体4カ所に分類できる。

①～⑤は大泉川周辺、⑬～⑰は大清水川、⑧～⑪、⑱～⑳、㉔～㉕は山麓扇状地上、㉖～㉗は無名の多くの沢が入っている場所等であり、いずれにしろ、水利の便の良い場所に集中していることを疑う余地は全くない状態であります。遺跡分布の内訳は旧石器時代3、縄文中期時代25、縄文後期時代4、縄文晩期時代1、弥生後期時代2、土師器7、須恵器10、灰釉陶器4、中世2である。

(飯塚政美)

参考文献

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(伊那市内その2)昭和48年度

上伊那誌(自然篇)

上伊那誌(歴史篇)

塚畑遺跡(緊急発掘調査報告書)1976 伊那市教育委員会・関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

中の原・古屋敷遺跡(緊急発掘調査報告書)1976 伊那市教育委員会・南信土地改良事務所刊

金鉤場・財木遺跡(緊急発掘調査報告書)1977 伊那市教育委員会、関東農政局伊那西部農業水利事業所刊

大萱遺跡(緊急発掘調査報告)1975 伊那市教育委員会 南信土地改良事務所刊

与地原・北割遺跡 1977 伊那市教育委員会 南信土地改良事務所刊

金鉤場遺跡(緊急発掘調査報告)1979 伊那市教育委員会



西箕輪地区辺界分布図

遺跡の名称

- | | | | |
|-----------|----------|--------|---------|
| ① 中道南 | ② 板畑 | ③ 久保田 | ④ 塚畑 |
| ⑤ 高根 | ⑥ 北割 | ⑦ 田代 | ⑧ 古屋敷 |
| ⑨ 金鈔場 | ⑩ 上溝 | ⑪ 葦鹿山麓 | ⑫ 経ヶ岳山麓 |
| ⑬ 西箕輪小学校北 | ⑭ 伊那養護学校 | ⑮ 熊野神社 | ⑯ 在家 |
| ⑰ 大萱西 | ⑱ 殿屋敷 | ⑲ 宮垣外 | ⑳ 天庄 I |
| ㉑ 天庄 II | ㉒ 上戸 | ㉓ 富士垣外 | ㉔ 堀の内 |
| ㉕ 小花岡 | ㉖ 中の原 | ㉗ 下の原 | ㉘ 与地山手 |
| ㉙ 与地原 | ㉚ 財木 | | |

凡 例

- 1 今回の発掘調査は西部開発に伴う、西部送水管事業で、第3次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2 この調査は、西部送水管事業に伴う緊急発掘で、事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、昭和54年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美，友野良一

◎図版作製者

- 遺構及び地形実測図 友野良一，根津清志，飯塚政美，小木曾清
- 拓 影 友野良一，根津清志，飯塚政美，小木曾清
- 石器実測図 根津清志，飯塚政美
- 土器実測 根津清志，小木曾清

◎写真撮影

- 発掘及び遺構 友野良一，飯塚政美，小木曾清
- 遺 物 友野良一，飯塚政美，小木曾清

- 5 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

宮垣外遺跡

目 次

目 次	(1)
挿図目次	(2)
表 目 次	(2)
図版目次	(2)
第I章 発掘調査の経過	(3)
第1節 発掘調査の経緯	(3)
第2節 調査の組織	(3)
第3節 発掘日誌	(4)
第II章 遺 構	(7)
第1節 住居址	(11)
第2節 竪 穴	(14)
第3節 柱穴群	(16)
第4節 土 壇	(16)
第5節 集石土壇	(19)
第6節 集 石	(20)
第III章 遺 物	(22)
第1節 土 器	(22)
第2節 石 器	(28)
第IV章 まとめ	(29)

挿 図 目 次

第1図	地形及び遺構配置図	(7)
第2図	第1～3号住居址，第6号竪穴実測図	(9)
第3図	第4号住居址実測図	(12)
第4図	第5号住居址実測図	(13)
第5図	第6号住居址，第1号柱穴群実測図	(14)
第6図	第1～2号竪穴実測図	(15)
第7図	第3号竪穴実測図	(15)
第8図	第4号竪穴実測図	(16)
第9図	第5号竪穴実測図	(16)
第10図	第1～2号土坑実測図	(18)
第11図	第3～6号土坑実測図	(18)
第12図	第7～13号土坑実測図	(19)
第13図	第1号集石土坑実測図	(20)
第14図	第1号集石実測図	(21)
第15図	土器拓影	(23)
第16図	土器拓影	(24)
第17図	土器拓影	(26)
第18図	土器実測図	(27)
第19図	土器陶器実測図	(27)
第20図	石器実測図	(28)

表 目 次

第1表	土坑要目一覧表(抄)	(17)
-----	------------	------

図 版 目 次

図版1	遺跡全景	図版6	遺 構
図版2	遺 構	図版7	遺 構
図版3	遺 構	図版8	遺 構
図版4	遺 構	図版9	遺物出土状況
図版5	遺 構	図版10	出土遺物

第I章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市においては、西箕輪、西春近地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡、昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金紡場遺跡の調査が行われてきた。本年度は宮垣外遺跡、天庄Ⅱ遺跡、堀の内遺跡、小花岡遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和54年7月12日 県教育委員会より関指導主事が来伊し、予算査定をする。

昭和54年7月18日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをする。

昭和54年7月23日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをして、発掘承諾書をいただく。

昭和54年7月24日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

・宮垣外遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊 沢 一 雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福 沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	赤 羽 映 土	伊那市教育委員長
"	向 山 辻 雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北 村 忠 直	伊那市教育委員会前教育次長
"	三 沢 昭 吾	" 教育次長
"	石 倉 俊 彦	" 社会教育課長
"	有 賀 武	" " 課長補佐
"	米 山 博 章	" 社会教育前係長
"	武 田 則 昭	" 社会教育係長
"	沖 村 喜久江	" 社会教育主事

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学協会会員
副 団 長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
"	御 子 柴 泰 正	"
調 査 員	飯 塚 政 美	"

調査員	福沢幸一	長野県考古学会会員
〃	田畑辰雄	〃
〃	小木曾清	宮田村考古学友の会会長
〃	春日徳明	大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年7月25日 本日より現場へ入る。関東農政局側で地主と話しをつけた際に張った赤テープの内側を一応、センターを中心に東西2.5m、合計5mの幅で、白いビニール製の縄を貼りまわす。この範囲内が我々が実際に発掘調査する場所である。明日、テントを建てる場所の整地作業を行う。この場所だけの桑掘りを実施する。

昭和54年7月26日 本日は用地内の桑掘りを実施した。人数が増えてきたので、午前中で大戦終了した。午後、テント及び発掘器材を考古資料館より運搬し、昨日、整地した場所に建てる。テントは夏場なので横簾を貼りまわすとするので、上の屋根だけをかけるかっこうをとる。テント1張だけではスペースがせまいので、北側へシートによるひさしを出す。

昭和54年7月27日 本日はグリッドを設定する。発掘用地は5mだけしかないので、センターを中心に、東、西にそれぞれ2m幅のグリッドを設け、市松状に掘っていく。両側の派数のグリッドは逐次考えることとする。畑がとびとびになっているので、区で分けることにして、いちばん南側を1区とする。テントのすぐ北側、東側の地点をA1とし、東から西へA～B、南から北へ1～15とする。A1より掘り始める。B2、A3、B4、A5附近は遺物もかなり出土し、落ち込みらしきものがみられたので拡張する。

昭和54年7月28日 昨日、実施した落ち込み部分をさらに拡張して精査をしてみると、落ち込み部には砂礫層の堆積が厚かった。落ち込み部分の掘り込み面の基盤が傾斜をもっており、どうも傾斜による川の堆積のように思われた。遺物は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器片であった。

昭和54年9月14日 途中、とびとびになったのは用地の問題が若干残っ



発掘風景(第Ⅲ区)

ていたので、他の遺跡を掘っておいて、本日よりまた宮垣外遺跡へ入る。道具を運搬し、テントを張る。桑掘り用のブルドーザーを桑畑へ入れる。一日中かかってはほぼ全面積にわたって抜根してしまふ。

昭和54年9月15日 前に続いてグリットは第Ⅱ区とし、名称は東から西へA～C、南から北へ1～17とグリットを設けて掘り下げていく。第Ⅱ区B2付近に弥生後期の甕があり、しかもこれは伏さった状態であった。

昭和54年9月16日 第Ⅱ区の北側へ第Ⅲ区を設け、そのなかにグリットを設定する。グリット名は東から西へA～C、南から北へ1～28として掘り下げていく。遺物の出土量は割合に少なかった。

昭和54年9月17日 グリットをⅢ区A1より市松状に掘り下げていくとA1・B1に附近に多量の遺物が出土し、住居址の確認が明らかとなった。さらに本住居址群は切り合い関係になっていた。

昭和54年9月18日 昨日の住居址のプラン確認とともに、さらに、グリット掘りを北へ北へと進めていくと、北側の川近くに多数の土坑が集中して検出され、どうも土坑群になりそうである。

昭和54年9月19日 住居址のプラン確認のために拡張、土坑群のプラン確認のために拡張する。

昭和54年9月22日 住居址の掘り下げを実施したり、土坑群のセクションを残しての掘り下げを実施する。

昭和54年9月23日 全景写真がとれるようにやぐらを組む。

昭和54年9月25日 住居址の掘り下げを実施する。

昭和54年9月26日 住居址の掘り下げを実施する。

昭和54年10月1日 第1号住居址から第3号住居址及び第1号土坑から第10号土坑のプラン確認をする。土坑はセクションを残して掘り下げていく。住居址の切り合い関係は第1号住居址は第2号住居址に切られ、第2号住居址は第3号住居址に切られている。

昭和54年10月2日 第1号住居址から第3号住居址の掘り下げを実施し、ほぼ完掘する。第1号土坑から第11号土坑までのセクションをとる。第1号住居址の東側に堅穴が見つかり、第1号堅穴、第2号堅穴とする。夕方までにはほぼ完掘を終了する。それによると第2号堅穴を第1号堅穴が切っているようである。

昭和54年10月3日 住居址の掘り下げ及び清掃をしていると、3つの住居址の東側に堅穴が発見され、第3、4、5号堅穴と名づける。

昭和54年10月4日 第1号住居址から第3号住居址の掘り下げをほぼ完了する。第3号住居址に堅穴が発見された。これを第6号堅穴とした。土坑のセクションをとる、写真撮影を完了



発掘風景(第Ⅱ区)

する。

昭和54年10月5日 第1号住居址から第3号住居址の清掃をして、写真撮影をする。第1号～第6号竪穴の清掃をし、写真撮影を終了する。第1号土壇から第11号土壇の平面、断面実測をする。

昭和54年10月6日 第Ⅱ区の南側の弥生後期の土器が発見された一帯を拡張していると周辺に規則的に柱穴群の発見があった。このすぐ北側を拡張していくと石を伴う土壇があり、さらに北側に小さな石を一面に並べた配石が発見された。配石のなかから緑釉陶器片の出土をみた。第1号土壇から第11号土壇までの写真撮影をする。

昭和54年10月8日 弥生式土器の出土した附近の清掃、石を伴う土壇、配石の清掃をして写真撮影を終了する。第1号住居址から第3号住居址までの平面、断面実測をする。

昭和54年10月9日 第1号竪穴から第6号竪穴までの平面及び断面実測を終了する。全測図の作製にとりかかる。

昭和54年10月11日 弥生式土器の出土した附近の平面及び断面実測を済せる。

昭和54年10月12日 発掘地区全体をブルドーザーによって埋め戻しをしておく。

昭和54年10月13日 石を伴う土壇と、配石の実測、あとかたづけをする。

昭和54年10月15日 石を伴う土壇と配石址の実測

昭和54年10月16日 石を伴う土壇と配石址の実測

昭和55年1月～2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ送る。

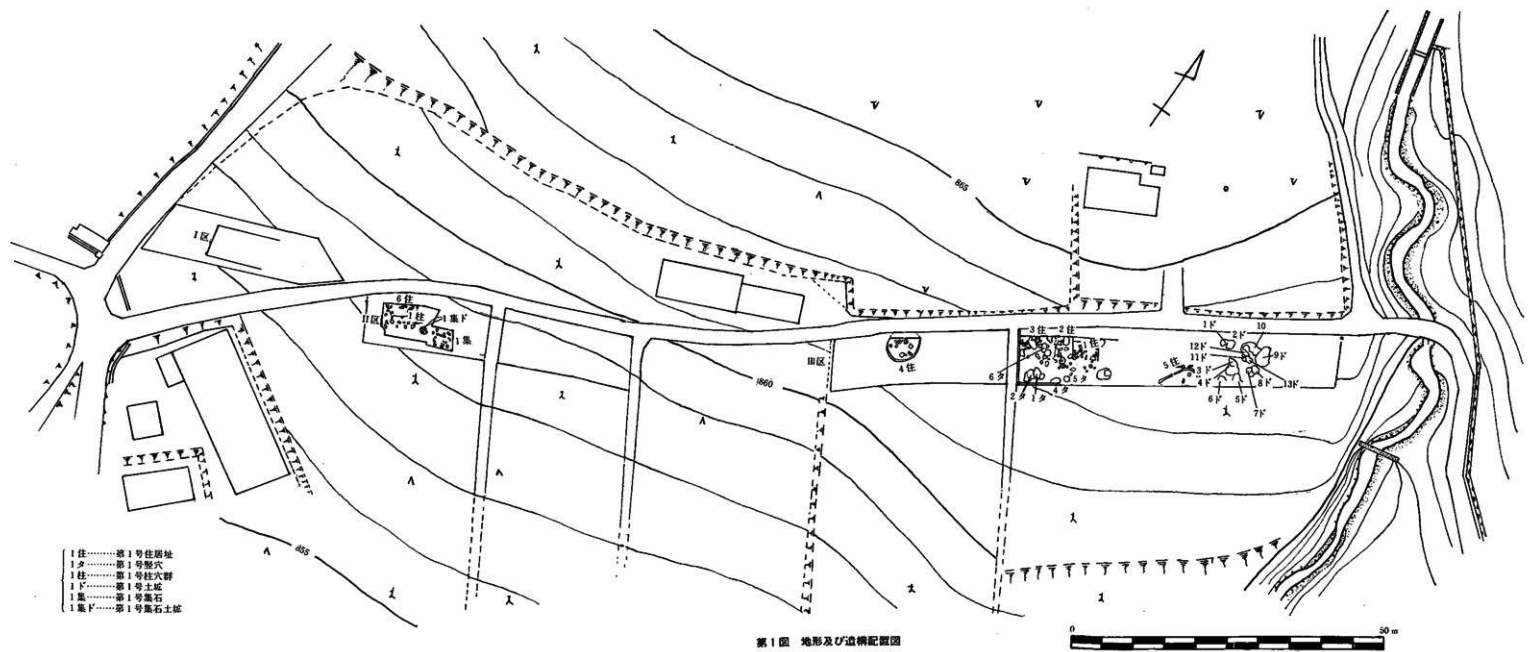
昭和55年3月 報告書を刊行する。

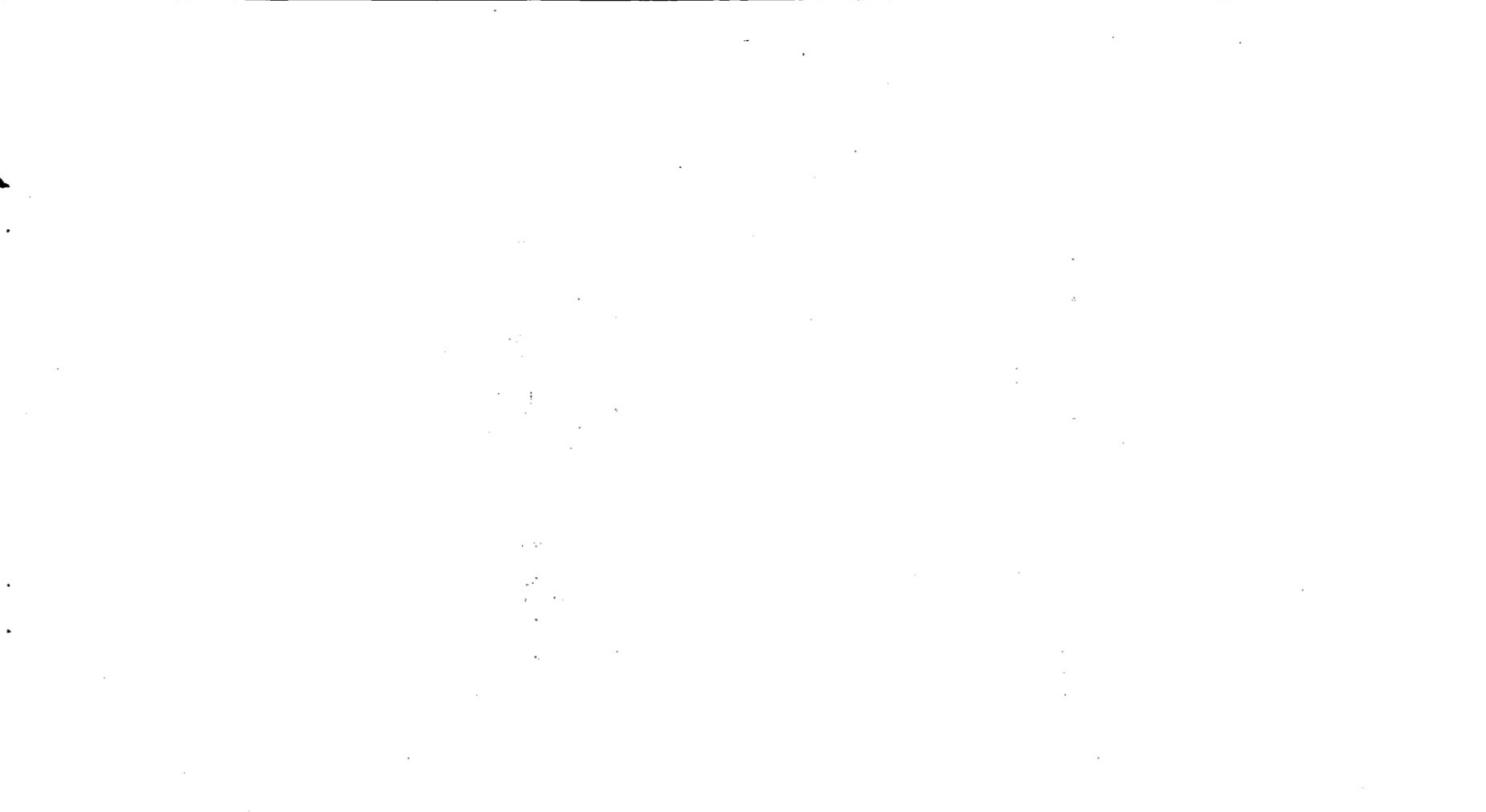
(飯塚政美)

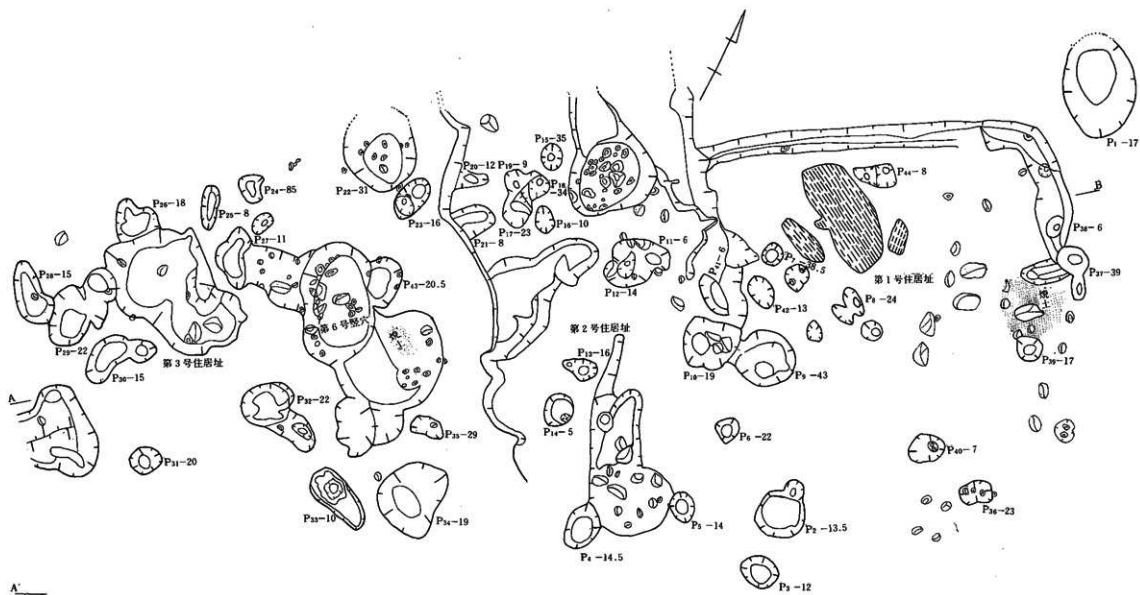
作業員名簿

平沢公夫、池上大二、赤羽幸寿、唐木馨、原修一、後藤重美、登内政光、大野田三千代、小池八重子、中村美さを、平沢八千子、小田切房子、白鳥あき子、井口はる子、工藤りよ子、酒井とし子、有賀鬼久雄、小池亘、飯塚真佐志、田中真弓、小沢邦彦、北原浩彦

(敬称略 順不同)





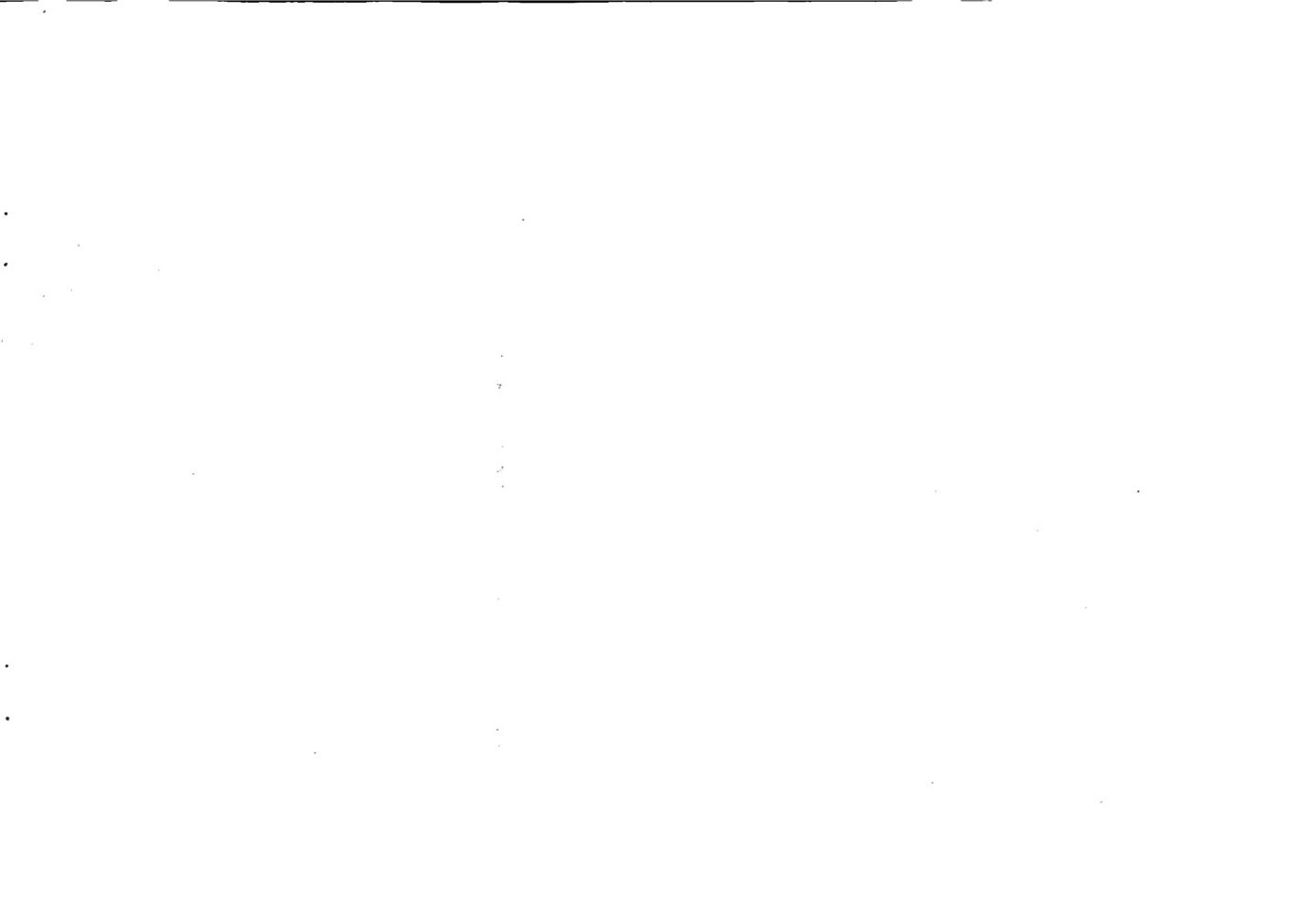


A

B



第2图 第1~3号住居址, 第6号壁穴实测图



第1節 住居址

第1号住居址(第2図, 図版2)

第Ⅱ区の真中辺にまたがって発見された竪穴住居址である。平面プランは隅丸形状を呈し、表土面より30cm位下った砂礫混じりの黄褐色土層面を掘り込んで構築してある。規模は南側で第2号住居址に切れ、東側は壁がないので、不明である。

壁の状態は西壁、北壁は内傾気味で、凹凸はやや多く、かたくなっている。床面は大般平坦であるが、ところどころにブロック状に凹凸があり、かたくなっていた。ピットは数多く発見されたが、主柱穴となりそうなのは、深いものが、それになりそうである。

カマドは北壁中央部附近にあったと思われるが、大部分破壊されてしまって、わずかに焼土と小さな石が露出していた。これらの石は赤く焼けた跡がみつかった。床面上に火災にあったと見えて、多量の木炭の出土をみた。遺物は土師器、須恵器が出土した。したがって本址は奈良時代の住居址と思われる。

第2号住居址(第2図, 図版3)

本址の東壁はナン、北側で第1号住居址を切り、西側は用地外、南側は第3号住居址に切られている状態で出土した。表土面より30cm位下った黄褐色土層面を掘り込んだ竪穴住居址で、規模は前述した状態なので不明、現存する状態で推定するに隅丸方形プランと思われる。北壁は30cm位で、壁面は凹凸が多く、かたく、外傾気味である。

床面はかたく、凹凸は多い。カマドは東壁中央部附近にあったと思われるように、その附近に焼けた石と、わずかに焼土がみられた。察するに石組粘土カマドと思われる。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土、したがって、本址は平安時代の住居址と思われる。

第3号住居址(第2図, 図版3)

本址は北側で第2号住居址を切り、東壁、南壁はナン、西壁は用地外の状態で出土した。表土面より30cm位下った黄褐色土層面を掘り込んだ竪穴住居址を呈し、その規模は不明である。プランは推定するに隅丸方形形状を呈すると思われた。

壁は北壁の残存している部分はかたく、やや内傾気味であった。床面は大般水平でかたい。カマドは構築時には当然あったと思われるが、切り合い関係、あるいは耕作時の攪乱のために現存はみられなかった。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土したが、本址は平安時代の住居址と思われる。第1号住居址から第3号住居址の新旧関係は第1号住居址が最も古く、第2号住居址、第3号住居址の順で、第3号住居址が最も新しい。

第4号住居址 (第3図, 図版3)

第3号住居址と道をへだてて南側に発見され、表土面より60cm位下った礫混合の黄褐色土層面を掘り込んだ円形プランを呈する竪穴住居址である。規模は東西5m5cm, 南北は北側は用地外のため不明である。

壁高は15~30cm内外を測り、やや外傾気味で、壁面はかたく、凹凸は少ない。床面は黄褐色土層面のかたいタタキで、大般水平である。

炉は住居址の中央よりやや北側にあり、規模は南北52cm, 東西50cm位の方形石面炉である。炉石は四面とも自然石の一枚石を利用して構築してあった。炉底には焼土は少なく、そのかわり附近のピット内の上面に多量の焼土の検出をみた。

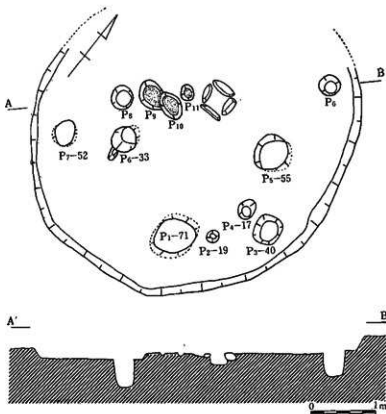
ピットは全部で11カ所検出されたが、主柱穴は深いものが、それに該当すると思われる。P₈, P₅, P₁, P₁のように断面袋状のは貯蔵穴のように思われる。

遺物は縄文中期中葉の土器片が出土した。したがって、本址は縄文中期中葉の住居址と思われる。

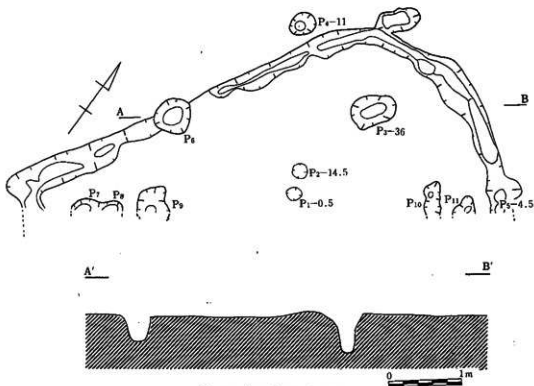
第5号住居址 (第4図)

本址は第1号住居址の北東の位置、用地外に接して検出された住居址である。掘り込み面は表土面から30cm位下った黄褐色砂礫混合土を掘り込んで構築されてある。壁高は浅く20cmに満たなく、壁面には細礫の露出が多く、凹凸状になっている。床面は大般水平であるが、軟弱であった。規模等、プラン等は全面発掘をしてみないと不可能である。

遺物は何も出土しなかった。想像するに縄文中期の住居址と思われる。



第3図 第4号住居址実測図



第4図 第5号住居址実測図

第6号住居址 (第5図, 図版4)

本址は第Ⅱ区の南側のA1ラインに検出された不整形を呈する竪穴住居址である。表土面より30cm位下ったローム層面を掘り込んで構築しており、ところどころに出張った部分もみられる。その規模は南北3m, 東西1m40cmを測る。

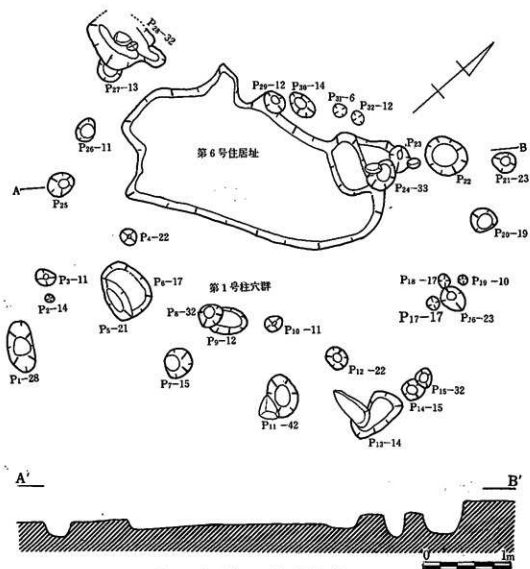
壁高は10~20cm内外を測り、全般的に外傾気味で、軟弱であった。床面はところどころでかたいところがみられたが、全般的には軟弱で、凹凸がはげしい。床面としては良好の方に属していると思われる。

柱穴の実態は把握できない。遺物は住居址の中央よりやや南側のところに弥生後期の甕が伏せった状態で出土した。この時期から考えるに埋甕炉とも考えられたが、それにしては焼土らしき跡は何も発見されず、現在のところは何を意味するものかは不明である。

本址は出土した甕からして弥生後期の遺構と考えられる。

以上6軒の住居址が発見されたが、限られた幅5mという用地内だったので、満足な形で検出されたのは1軒もなかった。6軒のうちで時代的な内訳は縄文中期時代の竪穴住居址2軒、弥生時代の竪穴住居址1軒、奈良時代の竪穴住居址1軒、平安時代の竪穴住居址2軒であった。

(飯塚政美)



第5図 第6号住居址, 第1号柱穴群実測図

第2節 竪穴

第1号竪穴 (第6図, 図版5)

第3号住居址の東側に発見され, 南壁で第2号竪穴を切っている。表土面より60cm位下った黄褐色土層面を掘り込み, 円形プランを呈する竪穴である。規模は南北1m3cm, 東西1m20cmほど測る。部分的に半円形状のとび出し部があった。

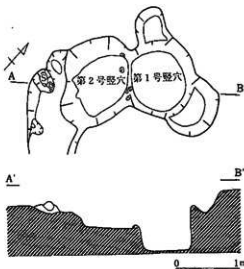
壁高は35cmから70cm程あり, 壁面は北, 西は外傾に近く, 東は内弯気味, ややかたく, 細礫を多く含む。床面は大槪水平でかたくなっていた。

遺物は縄文中期全般にわたって出土した。したがって縄文中期後葉に属していると思われる。

第2号竖穴 (第6図, 図版5)

北壁で第1号竖穴に切られているような状態で発見された竖穴である。平面プランは楕円形状を呈し、規模は南北1m55cm、東西1m27cm、深さ20cmを測る。

壁は外傾気味で、壁面に細礫を多く含む。床面は大般水平でかたいタタキになっている。遺物は縄文中期の土器片が出土した。縄文中期後葉に属すると思われる。



第6図 第1～2号竖穴実測図

第3号竖穴 (第7図)

第1・2号竖穴の北側に発見された竖穴である。平面プランは途中で段をつくるが、大般楕円形状を呈し、規模は南北2m15cm、東西1m79cm、深さは浅い方で15cm、深い方で60cmを測る。掘り込み面は砂礫混合の黄褐色土層面を掘り込んで構築してある。

壁は北、南は垂直に近く、東、西は内湾気味を呈し、壁面は細礫が多い。床面は大般水平でかたくなっていた。

遺物は縄文中期初頭の土器片が出土した。縄文中期初頭に属すると思われる。

第4号竖穴 (第8図, 図版5)

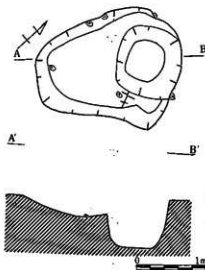
第3号住居址の北側に発見された竖穴である。東側は用地外のために発掘不可能、表土面より50cm位下った青ネバ層を掘り込んで構築してある。規模は南北は用地外のため不明、東西は1m42cm、深さ45cmを測る。

壁面は凹凸が多く、わずかに内湾気味で軟弱な状態である。床面はかたく、やや凹凸がある。遺物は縄文中期後葉の土器片が出土した。

第5号竖穴 (第9図, 図版6)

第1号住居址の東側に発見された竖穴である。平面プランは円形状を呈し、規模は南北96cm、東西73cm、深さ25cmを測る。覆土は黒色土が充満し、青ネバ層を掘り込んで構築してある。

壁面はやや外傾気味で、軟弱である。床面はほぼ水平で、軟弱であった。遺物は縄文中期後葉の土器片が出土した。



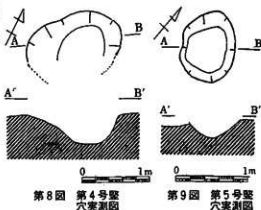
第7図 第3号竖穴実測図

第6号竪穴（第2図，図版6）

第3号住居址の床面を掘り込んで構築された竪穴である。平面プランは長円形状を呈し，規模は南北1m50cm，東西75cm，深さ65cmほどを測り，覆土は黒色土が充満していた。

壁面は大股垂直に近く，かたく，凹凸は少ない。床面はかたく，大股水平であった。遺物は何も出土しなかった。

（飯塚政美）



第8図 第4号竪穴実測図

第9図 第5号竪穴実測図

第3節 柱穴群（第5図，図版4）

本柱穴群は第Ⅱ区の南側，第6号住居址の周囲に広がった柱穴群である。柱穴群の掘り込み面はローム層である。柱穴の数は西側は用地外により発掘不可能であるが，現在ではその数は32である。ピットの大きさや，深さは第5図を参照してもらいたい，柱穴のなかに石をもっているのはP₂₃，P₁₁，P₁₃，P₂₂，P₂₄である。配列状態はP₁，P₂，P₃，P₂₅，P₁₆，P₂₇とP₁₄，P₁₅，P₁₈，P₂₀，P₂₁がそれぞれ一直線状に並ぶ。

遺物は土師器，須恵器，灰釉陶器が出土した。よって本遺構は平安時代に属すると思われる。

第4節 土 塚（第10～12図，図版6～7）

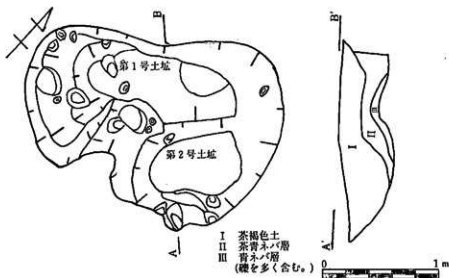
土塚は発掘地区の北側，第Ⅲ区に展開し，全部で13基検出された。土塚の全般的な諸特徴，及び諸々の問題等については第1表土塚要目一覧表（抄）に述べられているので照合されたい。第1表は，そのプラン，形態，遺構，共伴遺物，特徴等について記し比較検討できるようにしてある。第1表の見方については項目別に簡単な内容の説明を附記し，同時に若干の説明をしておくことにする。プランは平面，断面形の2方向から考えてみた。法量は大きさや深さを表示し，状態は床面と壁面を綿密に記しておくことにする。土塚に伴なう随附的なものとして，ピット，配石の有無を記しておくことにする。

遺物は土器と石器の項目を設けておく，土器は編年上による位置づけをしておく。備考には土塚の諸特徴について簡潔に記す，図番号・図版番号についてはその番号のみを記し，出土土器拓影図は番号とそのなかの細かな番号も記しておく。

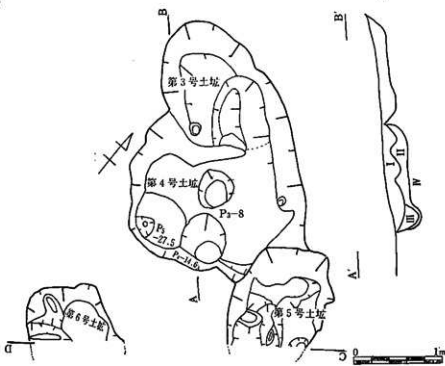
（飯塚政美）

第1表 土塚墓目一覽表(抄)

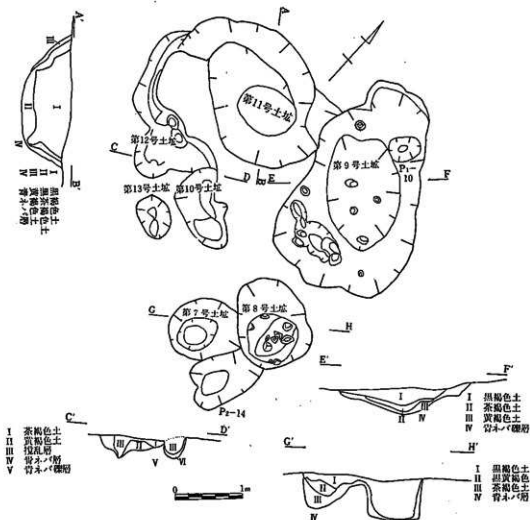
土塚 番号	ブ ラ ン 面	断面	法 量	状 態		小 穴	配石	道 物		備 考	図 香 号 図 取 番 号	土 器 拓 影 図
				床	壁			土 敷 (北 定 跡)	石 器			
1	不整形		径(cm) 218×102	40	たたく回 凸多い	縦斜強く 凸多い	あり	堀の内		兩壁は傾斜が強 い	10	第17図 (1~3)
2	"		148×89	42	中央がや や凹凸	垂直に近い	あり	加曾利E. 堀の内		第1号土甕を切 っている	10	第17図 (4~9)
3	円形状		105×137	50	凹凸多く 軟弱気味	外傾気味 軟弱気味	ピットあ り	堀の内			11	第17図 (10)
4	不整形		193×140	27	"	"	ピットあ り	菩提 茅山			"	第17図 (11~13)
5	円形状		129×?	78	凹凸多い 軟弱気味	外傾気味 軟弱気味	ピットあ り			兩壁は用地外築 造不可能	"	第17図 (14~16)
6	"		87×?	35	"	"	ピットあ り			"	"	
7	"		103×95	53	大體水平 軟弱気味	垂直気味 軟弱気味		加曾利E.			12	
8	楕円形状		103×135	57	大體水平 かたいた	垂直気味	あり	堀の内		壁面に細溝多い	"	第17図 (17~20)
9	"		187×315	40	凹凸多い 軟弱気味	外傾強く 軟弱気味	ピットあ り	加曾利E.			"	" (21)
10	"		113×65	70	凹凸あり 軟弱	凹凸は多 い細溝が えられる				兩側にマウンド をもつ	"	" (22)
11	"		185×195	73	大體平坦 軟弱	外傾気味 軟弱		加曾利E.			"	第17図 (23~26)
12	不整形		120×75	35	凹凸多い 軟弱	大體垂直 軟弱	ピットあ り	加曾利E. 祝所			"	第17図 (27~30)
13	楕円形状		52×50	50	大體平坦 軟弱	外傾気味 軟弱		堀の内		ピット状になっ ている	"	第17図 (31)



第10図 第1~2号土壇実測図



第11図 第3~6号土壇実測図



第12図 第7～13号土塚実測図

第5節 集石土塚 (第13図, 図版8)

本遺構は第1号柱穴群の北側と、第1号集石との間にはさまれた位置に検出された。その範囲は円形状に広がり、西側と東側との二つにわかれていた。西側のは南北3m60cm、東西3m70cmほどの規模を持ち、東側のは南北3m、東西2m80cmが測定できる。

配石されてある石は人頭大はどから一抱え程もあった。石の数は西側の方が多く、東側のはわずかに数個程度であった。石を取り除いていくと、底面までには六段からの石で成り立ち、段ごとに石の数の変動がみられた。石質は粘板岩が主であった。

六段の石を取り除いてみると、その下の土塚はローム層面を掘り込んで構築しており、壁面はかたく、わずかに外反し、床面はかたく、波をうっていた。遺物の出土は何もみられなかったので、時代は不詳である。

(飯塚政美)

第6節 集石 (第14図, 図版8)

本遺構は第Ⅱ区の真ん中辺, 東側は用地ぎりぎり, 第1号集石土坑の北側に近隣して発見された。表土面から50cm位下ったローム層面の上面に, 南北2m90cm, 東西3m20cmほどの規模で広がっている。

石の配列状態は二段から成り立っている。第14図のなかへその説明をしてあり, 空白のは第一段目の石, 斜線は第一段目の石である。石の大きさは大小さまざままで, こぶし大から人頭大, それから一抱え程の石と大小雑々であった。石の数は数えきれない程であり, 総体的には二段目の石は一段目の石の三分の一程度であった。

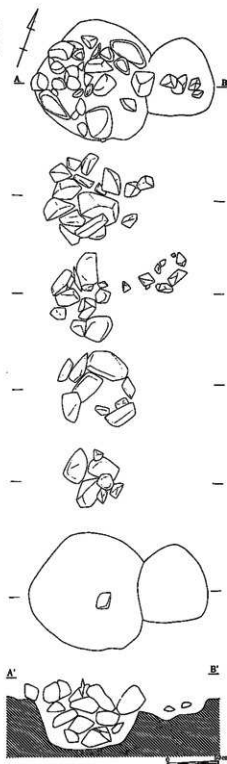
石は大部分が粘板岩質で, そのなかに混じって花崗岩や緑泥岩も若干含まれていた。石のなかには赤く焼けたのも, わずかではあるがみられた。

石のかたちは角張ったものや, 丸くなったもののが, 半分位であり, したがって, 石の配列のなかにはなにも規則性がないようにみうけられた。しいて言えば石の数は中心部は少なく, 西, 東, 北は割合に多く, 環状気味になっている様子もうかがえる。

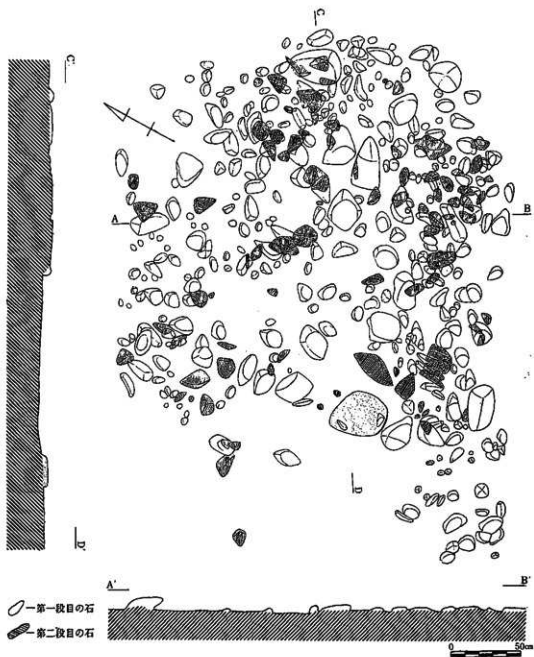
石のなかにはローム層にわずかにくいこんでいたのもあった。遺物は数量的には極めて少なかったが, そのなかで, 緑釉陶器片が石の上面より2片出ました。出土状態からして, 本遺構と直接的な結びつきについては疑問が残る。

この緑釉陶器片はいずれにしる祭祀的な色彩の強い遺物である。この付近で祭祀的な場所としては, 本遺跡地の後背に存在する御射山社との関連を考えてみなければならぬ。いずれにしる, このような釉薬のかかった祭祀品を使用するのは, かなりの有力者があり, 型式のにとった儀式が行われたものと考えられる。

(飯塚政美)



第13図 第1号集石土坑実測図



第14図 第1号集石実測図

第三章 遺物

第1節 土器 (第15~19図, 図版10)

第15図の1は第Ⅱ区より出土した土器片であり、沈線を縦位と横位につけてある。縄文中期初頭に含まれると思われる。(2~17)は第Ⅲ区内より出土した。(2~7)は爪形文の発達が見事なものである。爪形文の文様を細分してみると(2~3)は意匠文や抽象文的に、(4)は小さい爪形文、(5)は爪形文が鋭い、(5~6)は爪形文が大きくなっている。色調は明茶褐色(2)、赤褐色(4)、茶褐色(3)、黄褐色(5~6)を呈し、焼成は、良好(3)、普通(2, 6)、不良(4, 5, 7)である。胎土中には6片とも少量の長石や雲母を含んでいる。(2~7)は縄文中期中葉ごろと思われる。

(8)は荒い縄文が施されているもの。赤褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に少量の長石を含んでいる。縄文中期中葉に位置づけられると思われる。(9)は粘土紐による貼り付け文様がみられるもの。黒褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の雲母を含んでいる。縄文中期後葉の初めの方に位置づけられる。(10~11)は縄文地に沈線による懸垂文が走っているもの。色調は黒褐色(10)、明黄褐色(11)を呈し、焼成はともに不良、胎土中に両片とも少量の長石を含んでいる。

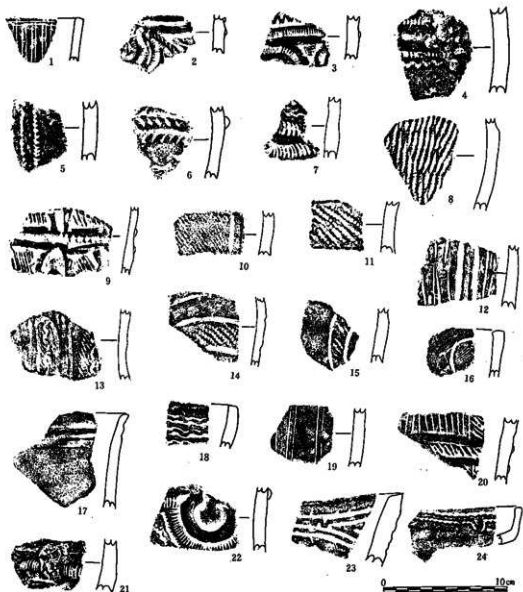
(12~13)は懸垂文が省略化され、その退化期に入るころの土器片である。色調はともに黒褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に少量の雲母を含んでいる。(10~11)は縄文中期後葉の中頃、(12~13)は同期の終わりごろと思われる。

(14~16)は磨消縄文の発達するころのものと思われ、磨消を成す、沈線が横位(14)、弧状(15~16)にそれぞれ施されている。色調は黒褐色(14~15)、黄茶褐色(16)を呈し、焼成は3片とも普通、胎土中に多量の長石を含んでいる。縄文後期前半ごろに位置づけられると思われる。(17)は無文地に口縁近くに横位の沈線が見られるもの、色調は明茶褐色。焼成は普通、胎土中に少量の長石を含んでいる。縄文晩期の中ごろと思われる。

(18~24)は第4号住居址内より出土した土器片である。(18)は口縁部破片で、沈線を波状に横位に配してある。黒褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に多量の雲母を含んでいる。(19~20)は沈線を縦位や斜目に施してあるもの。(19)は破片のところどころに、(20)は器面一杯にみられる。色調はネズミ色(19)、赤褐色(20)を呈し、焼成はともに良好で、多量の雲母を含んでいる。(18~20)は縄文中期初頭に属していると思われる。

(21~22)は隆帯の縁に刻目をつけ、全体的にはムカデ文様風に構成してある。色調は2片とも赤褐色を呈し、焼成は普通で、胎土中に多量の雲母を含んでいる。これらの土器文様は縄文中期中葉の勝坂期に見られる特徴的な文様の一つである。

(23~24)は幅広の沈線が見られるもの。(23)は沈線を横位と斜目に配し、(24)は横位の間に小さな爪形文を連続的に施してある。色調はともに赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の長石を含んでいる。勝坂期に含まれる。



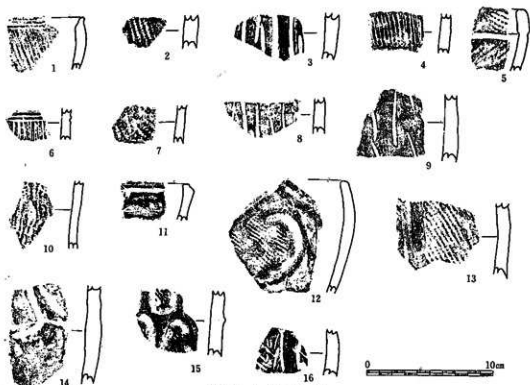
第15圖 土器拓影

第16圖の(1～5)は第1号壜穴、(6～9)は第2号壜穴、(10～11)は第3号壜穴、(12～14)は第4号壜穴、(15～16)は第5号壜穴からそれぞれ出土している。

(1)は沈線が縦位や斜目、あるいは横位に施されているもの。色調は明黄褐色を呈し、焼成は普通で、胎土中に多量の長石を含み、長石粒が露出していた。(1)は縄文中期初頭に位置づけられる。(2)は外面一杯に斜縄文を施してある。赤褐色を呈し、焼成は普通で、胎土中に少量の長石を含んでいる。縄文中期中葉に位置づけられると思われる。

(3～4)は沈線を縦位につけてあるもの。(3)の沈線は幅広で、(4)のそれは細くて深い。(5)は沈線地を区切るようにして幅広の沈線が横位に走っている。(3～5)は縄文中期後葉に位置づけられると思われる。(10)は外面一杯に斜縄文を施してあるもの。黒褐色を呈し、焼成は良好

で、覆土中に少量の長石を含んでいる。(11)は無文地に横位の隆帯を貼り付けてあるもの。色調は明茶褐色を呈し、焼成は中位、胎土中に多量の長石を含んでいる。(12)は縄文地に低い隆帯を渦巻状につけてあるもの。(13)は縄文地に幅広く、浅い沈線を縦位に懸垂文風につけてあるもの。(14)は無文地にヘラによる沈線をつけてあるもの。(15)は縄文地に低い隆帯を複雑にはりつけてある。(16)は沈線をハの字状につけてある。



第16図 土器拓影

第17図の(1~3)は第1号土坑内の出土である。(1)は無文、(2)は縄文、(3)は磨消縄文がそれぞれの主文様である。色調は赤褐色(1)、黒褐色(2~3)を呈し、焼成は良好(1, 3)、不良(2)、胎土中に全て少量の長石を含んでいる。縄文後期初頭に位置づけられそうである。

(4~9)は第2号土坑より出土した土器片である。(4)は無文地に沈線を弧状に二本配し、それらを連結させるかのように小さな隆帯を貼り付けてある。(5~7)は縄文地に隆帯や沈線による懸垂文を配してあるもの。(8)はヘラ状工具による沈線をハの字状につけてある。(9)は磨消縄文手法のみられるもの。色調は黒褐色(5, 6, 9)、赤褐色(8)、明茶白色(4, 7)を呈し、焼成は良好(4, 9)、普通(5~8)を成し、全て、胎土中に多量の長石を含んでいる。(4, 9)は縄文後期初頭に、(5~8)は縄文中期後葉にそれぞれ位置づけられると思われる。

(10)は第3号土坑より出土した土器片である。無文で文様を形成している。黒茶褐色を呈し、焼成は不良、胎土中に多量の長石を含んでいる。

(11~13)は第4号土坑より出土した土器片である。(11)は縄文をわずかに羽状縄文の手法がみられる。(12)はヘラによる沈線や隆起線文がみられ、(13)は磨消縄文のなところがみられる。色調

は黒褐色(11, 13)を、明黄褐色(12)を呈し、焼成は良好(11, 13)、普通(12)である。胎土中に多量の雲母(11, 13)、少量の繊維(12)を含んでいる。(11)は諸磯期、(12)は鍋ヶ島台式に属していると思われる。

(14~16)は第5号土坑より出土した土器である。(14)は沈線が斜目に走り、(15~16)は同一個体であり、隆起線とその線にヘラによる沈線を垂下させ、それらのなかへ細い縄文を配してある。色調は黄褐色(14)、赤褐色(15~16)を呈し、焼成は普通である。

縄文中期後葉と思われる。

(17~20)は第8号土坑より出土した土器片である。(17)は低い隆帯を上下に貼り付け、その上に円形刺突文を配している。隆帯から細い沈線を斜目に無数入れてあった。

(18~20)は幅広く沈線が垂下しているもの。色調は黒褐色(18, 20)、赤褐色(19)、明茶褐色(17)を呈し、焼成は良好(20, 18)、普通(17, 19)を呈している。胎土中に少量の長石を含む。これらは縄文中期後葉と思われる。

(21)は第9号土坑より出土した土器片である。色調は赤褐色を呈し、焼成は不良で、胎土中に少量の長石を含む。縄文後期初頭と思われる。(22)は第10号土坑より出土した土器片である。低い細い隆帯を蛇行状に貼り付け、その下に沈線を斜目につけてある。色調は明茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の雲母を含んでいる。

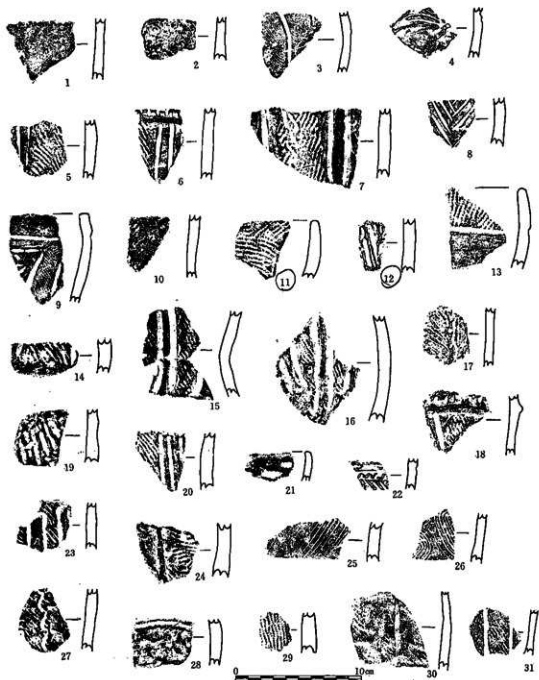
(23~26)は第11号土坑より出土した土器片である。(23)はヘラによる沈線を幅広く施してある。(24)は縄文地に低い隆帯を貼り付けてある。(25~26)は細く、深い沈線を不規則に配してある。色調は黒褐色(23, 25)、赤褐色(24)、明白褐色(26)を呈し、焼成は良好(26)、普通(23~25)を成している。

(27~30)は第12号土坑内より出土した土器片である。(27)は縄文地に蛇行状に沈線を配し文様をつくっている。(28)は無文地に破片上部には沈線を横位に配してある。

(29)は細かな縄文を配してある。(30)は無文地に縄文や沈線が縦位にみられる。色調は(27)は明黄褐色、(28)は茶黄褐色、(29)は赤褐色、(30)は黒褐色を呈する。焼成は良好(30)、普通(29)、不良(27~28)を呈し、胎土中に多量の長石(27, 28)、少量の長石(29, 30)を含んでいる。(27, 29)は縄文中期中葉に、(28, 30)は縄文後期初頭に位置づけられると思われる。

(31)は第13号土坑より出土した土器片である。細い縄文地に縦位に2本ヘラによる懸垂文をつけてあるもの。色調は黒褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に多量の雲母を含んでいる。

以上述べてきたのは縄文土器片が全てであるが、これは全体の出土量の $\frac{1}{10}$ 程度である。このなかで、文様の極めて特徴的な土器片を第15~17図の拓影に記載したわけであり、拓影図や説明によって出土した縄文土器片を編年的にみても、大般、縄文早期末葉、縄文前期後葉、縄文中期初頭、縄文中期中葉、縄文中期後葉、縄文後期初頭、縄文晩期の各時期にわたっていることがわかる。



第17圖 土器拓影

第18図の土器は第Ⅱ区の第6号住居址の床面状に倒立の状態出土したものである。口縁部は外反し、胴部が若干ふくらむ壺形土器である。口縁径は22.7cm、厚さは0.6cm内外を測定できる。

口縁部文様は無文部が主体を配し、胴部全体は数条にわたる描き文様が、右上りから左下がり

に走っている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好を成し、胎土中に多量の長石、雲母、石英を含んでいる。

本土器は弥生の後期に属していると思われる。

第19図の(1～7)は全て第1号柱穴群附近より出土した土器である。

(1)は土師器の杯の底部で、ロクロ仕上で、けずり高台である。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈し、胎土中に雲母を混入している。

(2)は灰釉陶器の杯で、ロクロ仕上げを成している。焼成は良好で固くしまっていた。色調は灰白色を呈し、胎土は精製されていて鉱物を含んでいない。

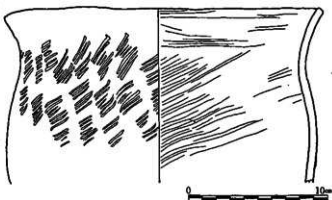
(3)は灰釉陶器の杯で、ロクロ仕上げを成している。焼成は良好で、固い、色調は灰白色を呈し、胎土に何も含んでいない。

(4)は灰釉陶器の杯で、ロクロ仕上げを成している。焼成は良好で、固い、色調は灰白色を呈し、胎土に何も含んでいない。

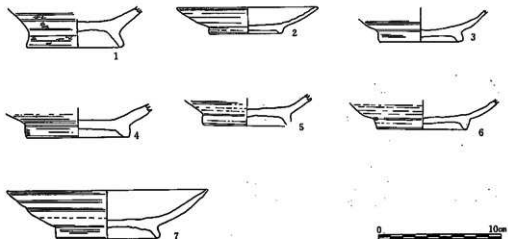
(5)は灰釉陶器の杯で、ロクロ仕上げを成している。焼成は良好で、固い、色調は灰白色を呈し、胎土は何も含んでいない。

(6～7)は灰釉陶器の杯で、ロクロ仕上げを成している。焼成は良好で、固い、色調は灰白色を呈し、胎土は何も含んでいない。

(飯塚政美)



第18図 土器実測図



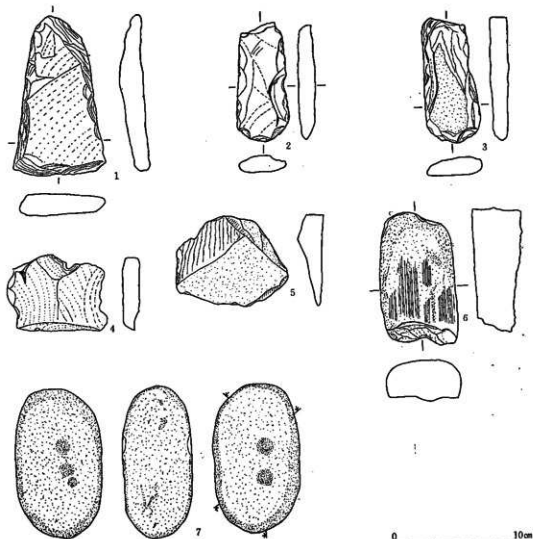
第19図 土器陶器実測図

第2節 石 器 (第20図, 図版10)

今回の発掘で出土した石器の総数は7点である。(1～3)は打製石斧であり、石質は(1～2)は硬砂岩、(3)は粘板岩を利用し、3つともグリット内の出土である。(1)は下部が大きく開く撥形、(2～3)は下部がわずかに開く撥形を呈している。

(4)はグリット内から出土した硬砂岩製の具形石器であり、皮剥の一種かと思われる。(5)はグリット内から出土した粘板岩の横刃形石器である。刃部の剝離はあまり丁寧な調整がゆきとどいていなかった。(6)グリット内出土の緑泥岩の磨製石斧である。その調整は上部は自然面を多く残り、中・下部は縦状に磨かれた跡がみとめられた。下部は丁寧な剝離が行きとどいていた。(7)はグリット内出土の安山岩の凹石で、その凹みは割合に多く、中央より、やや右側に凹みが2～3つある。

(飯塚政美)



第20図 石器実測図

第Ⅳ章 ま と め

西箕輪中条地区山麓扇状地状に分布している宮垣外遺跡を発掘調査した結果について、遺構・遺物について検討を加えてきたが、この章で簡潔的にまとめてみようと思う。

まず遺構については、竪穴住居址6軒、土坑13基、柱穴群1基、集石1基、集石土坑1基、竪穴6基である。これらの遺構について簡潔なる説明を加えてみたい。竪穴住居址6軒のうちで、縄文中期2、弥生後期1、奈良時代1、平安時代2、土坑13基は土坑群のな色彩が強いように思われ、全て、縄文中期に属していると推定できよう。柱穴群は灰軸陶器の出土より平安時代と確定できよう。集石は緑軸陶器片の出土より平安時代、集石土坑は遺物の出土がなく時期不詳と思われる。

第1号竪穴から第5号竪穴は縄文中期に属し、第6号竪穴は第3号住居址との切り合い関係より、平安時代と思われる。

遺構の規模については全般的な調査が不可能であったからその実態はつかめなかった。

遺物のうちでも土器についてであるが、その数は相当量出土したが、同破片が全て、今回の検出された遺構に直接的な関連性を有するかは多岐に疑問が残る。なぜかと言うならば、発掘地附近は西から東へ相当の傾斜地のために、山麓からの多量の押し出しがあったものと考えてみる必要がある。このことは石器にも同様と思われる。

まず土器については前の第Ⅲ章で述べてあるので、ここでは編年的なものに触れておこう。第15図の1は梨久保系、(2～3)は藤内式、(4～8)は井戸尻式と思われる。(9～13)は加曾利E期、(14～16)は堀の内式、(17)は大洞A式ごろにそれぞれ位置づけられると思われる。(18～20)は平出3A式、(21～24)は勝坂式。

第16図の1は梨久保系、(2)は勝坂式にそれぞれ属すると思われる。(10)は勝坂式、(11～16)は加曾利E式であろう。

第17図の(1～3)は堀の内式、(5～8)は加曾利E式に、(4・9)は堀の内式にそれぞれ位置づけられよう。(10)は加曾利E式、(11)は縄文前期後半の諸磯式に、(12)は縄文早期後葉の鶴ヶ島台式に位置づけられると思われる。

(14～20)は加曾利E式、(21, 28, 30)は堀の内式、(22～27, 29, 31)は加曾利E式、にふくまれる。

第18図は弥生後期中島式の一派に属しているものと思われる。

第19図の1は土師器のうちでも国分期に属し、灰軸陶器10世紀後半から11世紀初頭に位置づけられると思われる。

ここには触れてはないが、集石より出土した緑軸陶器片は、二つとも平安時代に位置づけられ、この遺跡地の西側にある御射山社との関係をもつと思われ、祭祀用に使用したものと思われる。

石器は7点出土しただけで、土器の量に比較して、その出土量は少なかった。

(飯塚政美)

图 版



遺跡遠景（東側より眺む）



遺跡近景（北側より眺む）



第1号～3号住居址。第1～6号竪穴全景



第1号住居址



第2号・3号住居址



第4号住居址



第5号住居址，第1号柱穴群



第1号住居址カマド



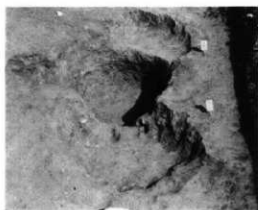
第2号住居址カマド



第4号住居址炉址



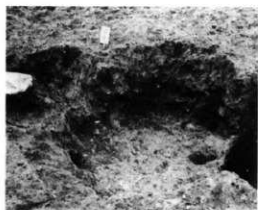
第5号住居址埋埋炉



第1・2号壑穴



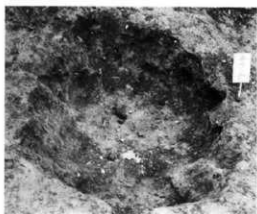
第1号壑穴



第2号壑穴



第4号壑穴



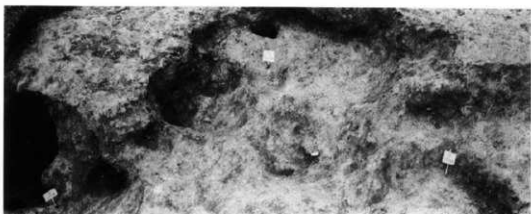
第5号壑穴



第6号壑穴



土坑群全景



第3・4・5号土坑



第10・12・13号土坑



第11号土坑



第4号土坑



第1号集石址



第1号集石土坛上面



第1号集石土坛下面



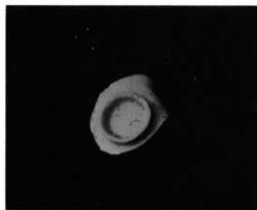
遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



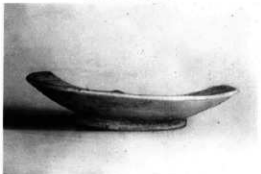
遺物出土状況



第5号住居址埋瓦炉出土



第1号柱穴群出土



第1号柱穴群出土



出土石器

宮垣外遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日 印刷

昭和55年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 株式会社 ぎょうせい

東京都新宿区西五軒町52

天庄Ⅱ遺跡

目 次

目 次	(1)
挿圖目次	(2)
図版目次	(2)
第I章 発掘調査の経過	(3)
第1節 発掘調査の経緯	(3)
第2節 調査の組織	(3)
第3節 発掘日誌	(4)
第II章 遺 構	(6)
第1節 住居址	(6)
第III章 遺 物	(10)
第1節 土 器	(10)
第2節 顔面把手	(17)
第3節 石 器	(17)
第IV章 まとめ	(19)

挿 図 目 次

第1図	地形及び遺構配置図	(7)
第2図	第1号住居址実測図	(6)
第3図	第1号住居址埋没断面図	(9)
第4図	第2号住居址実測図	(9)
第5図	第2号住居址埋没断面図	(10)
第6図	土器実測図	(11)
第7図	土器実測図	(13)
第8図	土器実測図	(14)
第9図	土器拓影	(16)
第10図	顔面把手実測図	(17)
第11図	石器実測図	(18)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺 構
図版3	遺構及び遺物出土状況
図版4	遺物出土状況
図版5	出土遺物
図版6	出土遺物
図版7	出土遺物

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市においては、西箕輪、西春近地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡、昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鉤場遺跡の調査が行われてきた。本年度は宮垣外遺跡、天庄Ⅱ遺跡、瀬の内遺跡、小花岡遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和54年7月12日 県教育委員会より関指導主事が来伊し、予算査定をする。

昭和54年7月18日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをする。

昭和54年7月23日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをして、発掘承諾書をいただく。

昭和54年7月24日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第 2 節 調査の組織

天庄Ⅱ遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
〃	向山 辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北村 忠直	伊那市教育委員会前教育次長
〃	三沢 昭吾	〃 教育次長
〃	石倉 俊彦	〃 社会教育課長
〃	有賀 武	〃 〃 課長補佐
〃	米山 博章	〃 社会教育前係長
〃	武田 則昭	〃 社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃 社会教育主事

発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調 査 員	飯塚 政美	〃

調査員	福沢 幸一	長野県考古学会会員
〃	田畑 辰雄	〃
〃	小木曾 清	宮田村考古学友の会会長
〃	春日 徳明	大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年7月30日 本日より天庄Ⅱ遺跡へ入る。この遺跡のなかで北側の傾斜面にある竹の抜根作業をする。抜根作業をしている段階で縄文中期の土器片を発見する。

昭和54年7月31日 昨日に引続いて抜根作業を行う。この作業が終了後直ちに、同じ場所にグリットを設定して、本格的な発掘調査を開始する。この地区は大きくⅠ区と決め、北側の方より、東から西へA～D、北から南へ1～2Iとして千鳥状に掘り下げていく。A2付近に炉を発見、第1号住居址とする。遺物は縄文中期土器片、近世陶磁器片の出土をみた。

昭和54年8月1日 道をはさんだ南側、Ⅱ区に決めようと思っている地区の桑の抜根作業を行う。

昭和54年8月2日 第1号住居址のはぼ完掘を終了する。時期は縄文中期の終わりごろである。床面は黒褐色土層であり、壁はわずかに南側の一部分だけ残っていた。グリット掘りを南へ南へと進めていく。

昭和54年8月3日 第1号住居址の清掃を行う。B11附近の遺物集中地区の掘り下げを行う。さらに、この附近のグリットを数カ所にわたって拡張すると、青ネバ層の落ち込みがみつき、第2号住居址とする。

昭和54年8月4日 住居址の中央部附近に南北にベルトを残して、掘り下げを進めていく。遺物の出土は莫大な量であった。青ネバ層のなかに黒土が落ち込んでいるので、発掘調査に困難をきたす。遺物は全てと言っていいほど、腰坂式であり、その文様は誠に見事であった。

昭和54年8月6日 第1号住居址の清掃を終え、写真撮影をすぐにとれる状態にしておく。第2号住居址の掘り下げをつづけていく。セクションの南北写真をとる。セ



発掘風景

クッションをとりはずし、ほぼ、その完掘を終了する。柱穴は明日掘ることにした。

昭和54年8月8日 第1号住居址、第2号住居址の清掃及びその写真撮影をする。Ⅱ区のグリット設定をする。北から南へ1～16、東から西へA～Bと決めて、A1より千鳥状に掘り進めていく。

昭和54年8月9日 グリット掘りを、南へ南へと進めていく。第1号住居址、第2号住居址の平面実測を行う。

昭和54年8月11日 第2号住居址の平面、第1号住居址、第2号住居址の断面実測を行う。晴天が続くが、標高が高いために、夏にしては、暑さをそう感じない。

昭和54年8月17日 午前中あとかたづけをして、すぐに運搬できるように整えておく。テントをこわしておく。全測図を作製する。

昭和55年1月～2月 遺構の図面整理、遺構の図面作製、遺物の実測、原稿執筆、報告書の作製、編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書刊行

(飯塚政美)

作業員名簿

平沢公夫、池上大二、赤羽幸寿、唐木穂、原修一、後藤重美、登内政光、大野田三千代、小池八重子、中村美さを、平沢八千子、小田切房子、保科徳子、白鳥あき子、井口はる子、番井とし子、有賀鬼久雄、小池亘、飯塚真佐志、田中真弓、小沢邦彦、北原浩彦、工藤りよ子

(敬称略 順不同)

第Ⅱ章 遺 構

第1節 住 居 址

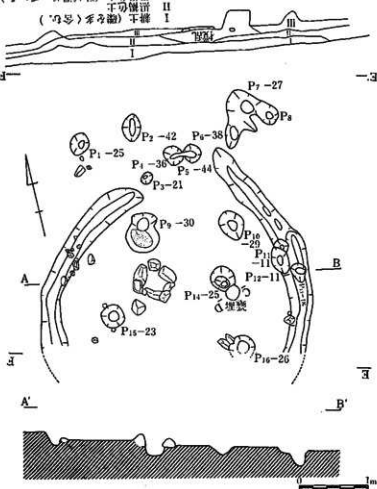
○第1号住居址 (第2 (9.12.10)期:4期) 不可解遺 III ~3期, 図版2~3) 不可解遺 II (9.12)期:4期) 不可解遺 I

本址は発掘した内ではI区の北側の方に位置して発見され、その全体は不明であるが推定するに円形状プランを呈する竪穴住居址と思われる。壁は北側の中央部附近は現況が竹林なので、その根による攪乱と思われる。南側は用地外のために発掘調査不可能である。砂や礫を含む黒褐色土層を掘り込んで構築しており、その規模は東西4m40cm, 南北は前述したように不明である。

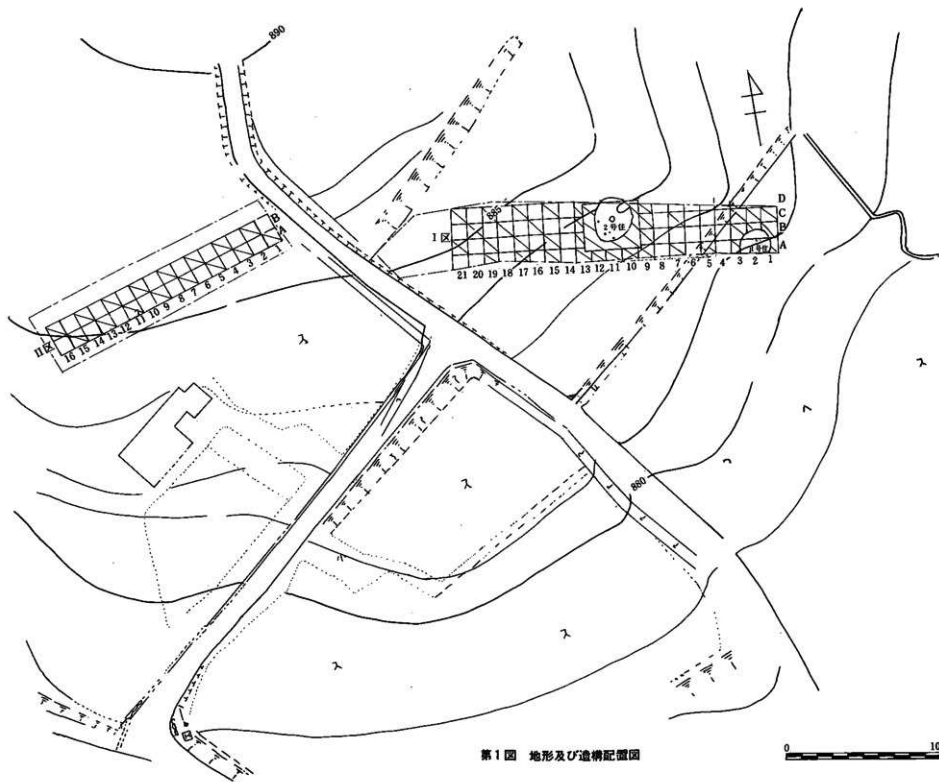
壁は浅く、20cm未満であり、状態は北壁では垂直に近く、礫の混合度が少なく、一部は攪乱気味であった。他の壁面には全般的に細礫の露出が多かった。

床面は黒褐色土層面にあり、小礫を含み、かたくしまり、南側がやや高く、北側がやや低いが、全般的には大般水平である。

周溝は北側の一部分では切れているが、15cm幅、深さ15cm位であった。炉は中央部よりやや北側に位置し、南北55cm, 東西60cm程の規模で、方形状を成していた。炉石は粘板岩や砂岩が多く、焼けて赤くなり、石に亀裂の入り具合が多かった。炉内の焼土はほとんどみられなかった。ただ、北側の炉の近くに多量の焼土の堆積がみられた。その厚さは10cm, 大きさは直径40cm位あり、おそらく炉内の灰を捨てたものと思われる。



第2図 第1号住居址実測図



第1圖 地形及び遺構配置圖

0 10

1. The first part of the document is a list of names and addresses of the members of the committee.

東側の位置に正位の状態に埋没があり、下部は欠損していた。この土器は加曾利E期の新しい時期と思われる。従って、本址は縄文中期終末の住居址と思われる。

第2号住居址 (第4～5図, 図版2～3)

本址は第1号住居址の南側に発見され、表土面より60cm位下った大きな礫混じりの青ネバ層を掘り込み、楕円形プランの竪穴住居址で、南北5m60cm、東西4m60cmの規模を持っている。壁は北、西が高くて35cm～45cm位の規模を持っている。壁は北、西が高くて35cm～45cm位の範囲、南、東は浅くて10cm内外であった。壁面は全般的に外傾し、凹凸が多く、こぶし大程の礫露出が多かった。

床面は青ネバ混合の土層でかたく、凹凸が多かった。柱穴のうちで主柱穴になりそうなのはP₉、P₁、P₇、P₁₃、P₁₁、P₅、P₄、P₁₅の8本と思われる。P₉は貯蔵穴の要素が見られる。

炉は、住居址の大殿中央部に位置し、南北73cm、東西62cm程の規模を持ち、円形状の周囲に石を配列し、そのなかへ

正位の状態に要を埋めてあった。いわば円形状石囲埋燵炉とも言うべきであろうか。この土器は下半分は欠損していたが、割れ口は意図的に整形してあった。焼土の状態は少量であった。

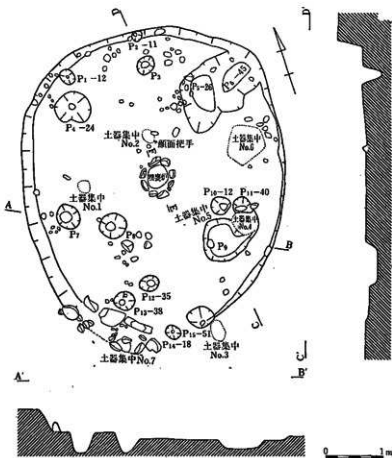
遺物は土器の出土量は多く、特に集中していた箇所を実測図の中に示しておいた。顔面把手は顔面が伏った状態で出土した。

本址は遺物からして、縄文中期中葉の住居址と思われる。

2軒の住居址を全体的にみても、第1号住居址は加曾利



第3図 第1号住居址埋燵断面図



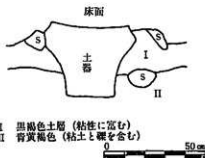
第4図 第2号住居址実測図

E期の新しい方に属していると思われる。同時期にしては F' 割合に炉の小さいのが、また、埋葬にはあまりみられない文様が特徴的であった。発掘地区が限定されているので、この一軒だけしかみられなかったが、全面発掘をしたならば、相当量の検出があると思われる。

第2号住居址は勝坂期と考えてよからう。伊那では、いまままでに同期の住居址は小さい。炉は石罌炉が多いのに、石罌埋葬炉は珍しいケースと考えざるを得ない。

遺物の出土量は莫大な量に達している。出土した土器は編年的にみるとどうも3時期位に分類できそうである。

顔面把手の住居址内出土はわかっているだけでも市内では数例しかない。



第5図 第2号住居址埋葬炉断面図

(飯塚政美)

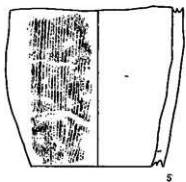
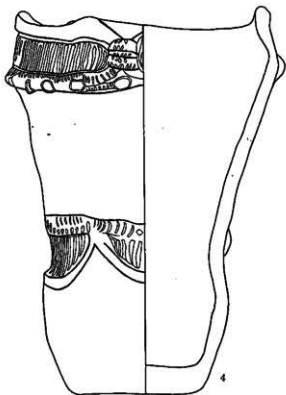
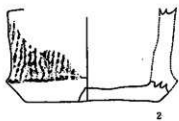
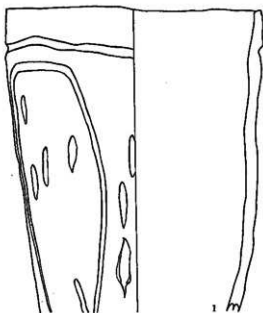
第三章 遺物

第1節 土器 (第6~9図, 図版3~7)

第6図の1の土器は第1号住居址から正位の状態で出土した埋葬である。口径は20.3cm, 器高は下部欠損により不明である。下部の現存する破片は人為的に切った跡が窺える。おそらく、埋葬にするときには廃品利用の様なかっこうをとったものと思われる。器厚は0.9cm内外を測定できる。器形は胴部が若干ふくらむ深鉢型土器である。口縁上部は無文, 下部はヘラによる幅広の、浅い沈線を配してある。胴部文様はヘラによる幅広の浅い沈線を弧状に配し, 上部で連絡し, 下部はそのまま垂れ下っている。これらの囲まれたなかに刺突文状に沈線がみられる。色調は上部は黒褐色, 下部は赤黄褐色を呈し, 焼成は不良, 胎土中に多量の長石を含んでいる。本土器は加曾利E期の新しい方に位置するものと思われる。

第6図の2は第2号住居址土器集中No3である。底部附近がみられるだけで, 大部分は欠損してしまっている。底径は10.1cmを, 器厚は1.4cm内外を測る。底部は勝坂期に陸盛する屈折状の底である。文様は荒い縄文をつけてある。色調は赤褐色を呈し, 焼成は普通, 胎土に多くの長石粒を含んでいる。本土器は井戸尻Ⅱ式に位置すると思われる。

第6図の3は第2号住居址土器集中No5である。口径は15.6cm, 器高16.8cm, 器厚は1cm内外, 底径は7.4cmを測る。器形は波状口縁を呈する深鉢型土器である。口縁部文様は口唇に密着して小さな環状突起がみられる。隆起線を横位に弧状に走らせ, それによって区画されたなかに縦位に, 細く, 深い沈線を施してある。隆起線の上に連続的に刻目をつけ変化に富むようにしてある。胴部上部文様は隆起線が横位に見られ, その上に連続状に刻目をつけてある。その下に二条にわたって



第6圖 土器実測圖

沈線を配してある。胴部から底部にわたっては細く、深い沈線を縦横、斜目状に施し、全体的には縦位の区画的な文様圖案を成している。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土に細かな長石粒を含んでいる。本土器は藤内式に属していると思われる。

第6図の4は第2号住居址土器集中No.4である。口縁径は20.1cm、器高は28.7cm、最大径21.5cm、器厚は10cm内外、底径9.7cmを測る。器型は口縁上部は内反し、口縁下部から胴部にかけて外反気味、胴下半分はつばまり気味、底部上部はふくらみ気味、底部は若干屈折気味を呈し、口唇部はやや波形を呈する波状口縁深鉢型土器である。

口縁上部文様は無文で若干肥厚気味、口縁中部文様は幅広の浅い沈線を横長に長円形状に施し、それらに囲まれたなかに半割竹管による狭く、深い沈線を縦位に、平行状に配してある。口縁下部文様は断面三角形の隆帯を横位に貼り付け、隆帯の上部に小さな、シャープの刻目を左上から右下に斜目状に施してある。隆帯の頂には指頭による指頭捺捺文をつけてある。

胴上部文様は無文から成り立っている。胴下部は幅広く、若干つぶれ気味の隆帯を横位に貼り付け、その上に刻目をつけてある。この隆帯より弧状に隆帯をつけ、それらに囲まれたなかに縦位に沈線を施し、いわゆる櫛形文と呼ばれる文様を構成している。底部近くの文様は無文である。

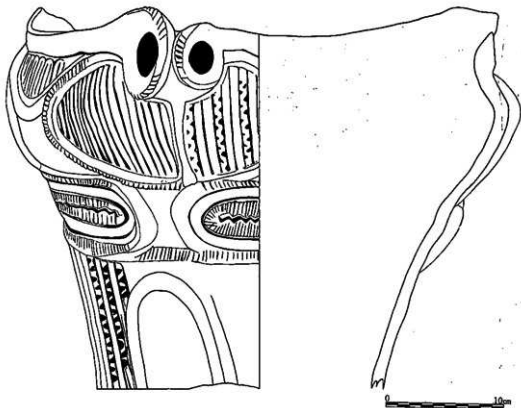
色調は赤褐色を呈し、焼成は良好な状態をなし、胎土中に少量の長石や雲母をふくんでいる。本土器は井戸尻式に位置していると思われる。

第6図の5は第2号住居址覆土より出土した土器である。法量に関しては全体的な形が把握できないので不明である。現存する形より深鉢型土器と思われる。

文様は半割により竹べらによって、せまく深い沈線を無雑作に無数配してある。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の長石、石英、雲母を含んでいた。

第7図は第2号住居址の炉のなかへ埋壺の形で出土した土器である。この炉については前にもふれておいたが、改めてここでも簡潔に述べておくことにする。炉の規模は南北73cm、東西62cmほどをなし、炉壁の上部に、こぶし大程の石を円周状に配置してあった。このなかに、ここで述べる土器が正位の状態に埋めてあった。

口縁径は39.7cm、器高は下部欠損により不明である。器厚は0.9cm内外を計り、口唇部へ行くに従って肥厚気味である。器型はわずかな波状口縁で、口縁下部は若干ふくらみ気味を呈する深鉢型土器である。下部欠損部分の裂口は人為的な跡がみられ、おそらく、廃品の利用の仕方なのであろう。口縁上部文様は口唇部から下にかけて環状把手を付けてある。口縁下部は隆帯を横位に貼り付け、小判形状の文様をつくっている。区画する隆帯の上に刻目をつけ、区画されたなかに隆帯に沿って沈線を配し、その中に沈線を縦位に入れてある。胴部上部文様は口縁部と同様な小判形文を横位に構成し、そのなかに抽象文をつけてある。胴部下部文様はところどころに沈線を数条縦位に配し、そのなかへほぼ等間隔に低い隆帯を蛇行状に垂下させてある。色調は口縁部では赤褐色、胴部では茶褐色を呈し、焼成はほぼ良好である。胎土中には少量ではあるが、雲母、長石、石英を含んでいる。本土器は井戸尻期の古い方に属していると思われる。



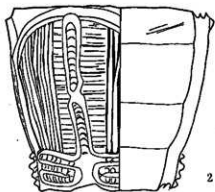
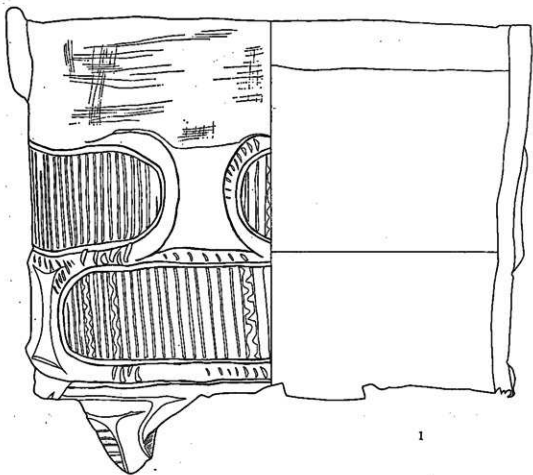
第7図 土器実測図

第8図の1は第2号住居址土器集中No 6である。口縁径は34.3cm、器厚は1.5cm内外を測り、厚さとしては極めて厚い。器高は下部が欠損しているために不明である。器形は口唇部附近はわずかに内反気味であるが、全体的には円筒形に近い深鉢型土器である。

口縁部文様はところどころに捺痕がみられるが、無文で構成されている。表面にはところどころに炭化物が附着して黒々となっている。胴部文様は隆帯を横長に、ちょうど小判のような形に貼りつけて区画をし、その中に深い沈線を縦位に走らせてある。これらの沈線の中に混じって、ところどころに蛇行状の低い隆線が縦位にみられる。区画するのに利用した隆帯の上に刻目を押捺してあるのも、一つの特徴的な文様と思われる。小判形の区画文は上下二段に分かれ、上段と下段では横位にずれて構成してある。

色調は黒褐色を呈し、焼成は良好で、胎土に長石を含む。本土器は藤内式土器と思われる。

第8図の2は第2号住居址の覆土より出土した土器である。上部、下部ともに欠損しているので大きさは不明である。文様は細い粘土紐を小判型や隆線を貼り付け、それらの間に沈線を配してある。赤褐色を呈し、焼成は普通、胎土に長石を含む。本土器は井戸尻Ⅲ式に属していると思われる。



第8图 土器実測图

第9図の(1~13)は第2号住居址より出土した土器である。(1)は隆帯を貼り付け、その上に指頭庄痕文のあるもの、さらに、横位の沈線もつけてある。赤褐色を呈する。(2)は沈線が横位と横位に規則正しく入っている。黒褐色を呈する。(3)は2と同様であるが部分的にカーブを描くような沈線がみられる。色調は赤褐色を呈する。(4)はわずかに外反する口縁部破片であり、文様は隆帯を横位に蛇行状に貼り付け、その上にC字状の爪形文を施してある。色調は黄褐色を呈する。(5)はムカデ文と呼ばれている抽象文の発達が著しいもの。色調は明黄褐色を呈し、焼成は普通で、胎土中に多量の長石や雲母を含んでいる。(6~7)は隆帯の縁に爪形文や刻目を加えてあるもの。色調は(6)では赤褐色、(7)では黒褐色を呈し、両片とも焼成は良好である。(8)は縄文を施してある。色調は赤褐色を呈し、焼成は不良、胎土中に多量の長石粒を含む。(9~10)は高く、また太い隆帯をつけてあり、その上に刻目がみられる。(10)は隆帯の下で櫛形文を成している。色調は黒褐色(9)、赤褐色(10)を呈している。(11)は櫛形文をなしている。色調は赤褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に多くの長石や石英を含んでいる。

(12~13)は粘土経による貼り付けが、割合に小さく、細いもの。色調は(12)は赤褐色、明黄褐色(13)を呈し、焼成は双方とも良好、胎土中に多量の雲母(12)、少量の長石(13)を含んでいる。

(14~24)は道橋外のグリットから出土した土器片である。(14)はおせんべい式土器と呼ばれている。おそらく木島式に属すると思われる。色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。(15)

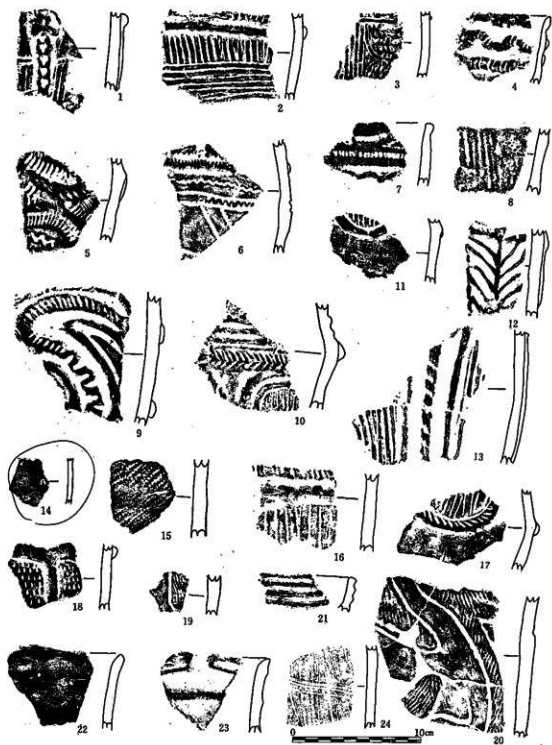
は斜縄文を施してあるもの。胎土中に少量の繊維を含む。色調は茶褐色を呈し、焼成は普通である。黒浜式土器と思われる。(16~17)は櫛形文の発達が著しく、隆帯の上に刻目を、それらの間に沈線を不規則に配してある。色調は双方とも赤褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に少量の雲母と長石を含んでいる。勝坂式の新しい方に属していると思われる。(18)は破片の上部は無文、破片の中央部には隆帯が左上から中央部で曲がり、それから垂下している。隆帯の縁に沿って細い沈線が回っている。沈線の回っているその中に小さな刺突文を施してある。加曾利E期の古い方に属する。

(19)は破片の中央部附近に沈線が垂下し、その右側に細かな斜縄文を配してある。色調は黄褐色を呈し、焼成は中位、胎土中に多量の雲母を含んでいる。加曾利E期の新しい方に属していると思われる。

(20)は縄文地に弧状の沈線を配し、磨消縄文手法をとり入れている。色調は破片上部で明赤褐色、下部で黒褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の長石を含んでいる。縄文後期後半に属していると思われる。

(21)は沈線が横位に数条走っている。色調は黒褐色を呈する。縄文晩期前半に属すると思われる。(22~23)は無文が主体を占め、外反する口縁部破片である。(23)は口唇部に隆帯を付け、その上に指頭庄痕文がみられる。色調は明黄褐色(22)、黒褐色(23)を呈する。(22~23)は縄文晩期前半と思われる。(24)は条痕文土器の仲間である。条痕を上部は斜目に、中部は横位に、下部は斜目につけてある。色調は明黒褐色を呈し、焼成は良好である。縄文晩期後半に属すると思われる。

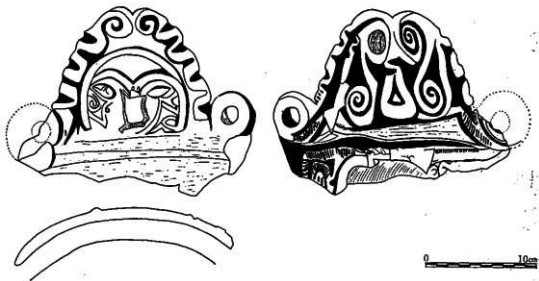
(飯塚政美)



第9圖土器拓影

第2節 顔面把手 (第10図, 図版5)

本把手は第2号住居址より出土したものである。現存するので、その高さは16cm、左右は最大幅20cmを実測できる。顔面の頭部と思われるところには両側から隆起線を蛇行状に表現した結末を渦巻文様風に意匠してある。おそらく、これは蛇の姿を圖案化したものと思われる。顔面の境界は低い隆線で円形状に工夫してある。眉毛は境界と同じような隆線で弧状に造作してある。眉毛と思われるところの合わさった点に鼻と思われる部分が見られる。鼻は小さな刺突文を左右に施して鼻の穴を表現していると思われる。目は木の葉状に沈線を施してある。目の下から変則的な沈線が奇妙に見られるが、これは文身の跡だと推定できよう。口の部分が欠損しているのは残念である。勝坂期にみられ、大深鉢の口縁にもとはついていたのであろう。(飯塚政美)



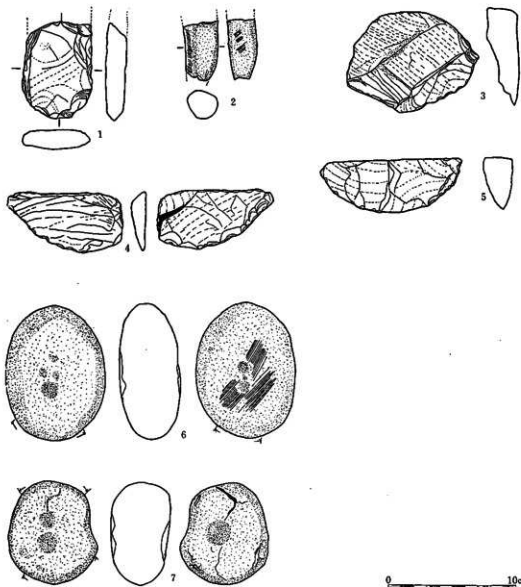
第10図 顔面把手実測図

第3節 石器 (第11図, 図版7)

今回の発掘で出土した石器の総数は7点である。(1)はグリット内から出土した硬砂岩の打製石斧で、上部は欠損している。剝離は石器の周囲にあり、それが刃部を成し、調整は丁寧である。(2)はグリット内から出土した緑泥岩の磨石で、上、下部ともに欠損している。磨石としては極めて小さい。(3~5)は横刃形石器であり、三つとも石質で硬砂岩を利用してある。(3~4)は第2号住居址の覆土、(5)はグリットよりの出土であって、ともに刃部を下につけ、調整は良好である。

(6~7)はともに凹石である。6はグリット内、7は第2号住居址よりそれぞれ出土し、6は

安山岩，7は硬砂岩を利用してある。(6)の一部は磨いた跡や，下部の一部に使用痕が認められる。凹みの穴は2つあり，深さは普通である。(7)は若干鋭っており，凹みは二つ認められ，それは割合に大きく，また浅かった。
 (飯塚政美)



第11圖 石器実測図

第Ⅳ章 ま と め

西筑輪中条地籍、山麓扇状地の扇頂部に展開する天庄Ⅱ遺跡の発掘調査を行った。発掘調査予定面積が幅5mと狭い範囲であったので、遺構が存在しても完全な検出はないものと当初より予定していた。

実際に発掘してみると、縄文中期中葉の竪穴住居址1軒、縄文中期後葉の竪穴住居址1軒の検出をみた。

発掘地区の北側で発見された第1号住居址は東側半分は用地外のために、発掘調査は不可能であった。黒色土層に構築された住居址であり、炉は出土した土器の時代決定からして割合に小さな方に属していると思われる。また、埋壔が1カ所みられたが、時期的に稀なケースとなると思われる。

第2号住居址は第1号住居址と大股同じような地層中に構築されており、用地内のはば中央部に位置して発見されたので、その全体的な調査が可能であった。円形プランを呈し、割合に大きな規模に属していると思われる。市内では数少ない勝坂式の住居址で、勝坂の古い方から新しい方まで、全般にわたって出土していた。ただ、本址の時代決定は埋壔炉の使用してあった土器によって考えるべきであろう。遺物の出土量はおびただしい量に達した。

土器について述べてみるならば、その編年的の説明にその主観を置こうと思う。第6～8図は第Ⅲ章遺物についてで詳細に述べてあるので、今回ははぶき、第9図以降の拓影のところで触れることとする。

(1～4)は勝坂式、(5～7)は簾内式、(8～10)は勝坂式、(11)は井戸尻式に、(14)は縄文早期後葉から前期初頭に位置づけられる木島式、(15)は縄文前期前半の黒浜式、(16～17)は縄文中期中葉の勝坂Ⅲ式、(18)は縄文中期後葉の加曾利EⅠ式、(19)は縄文中期後葉の加曾利EⅡ式、(20)は安行式、(21～23)は大洞系統、(24)は東海系の樞王、五貫森式土器に含まれると思われる。

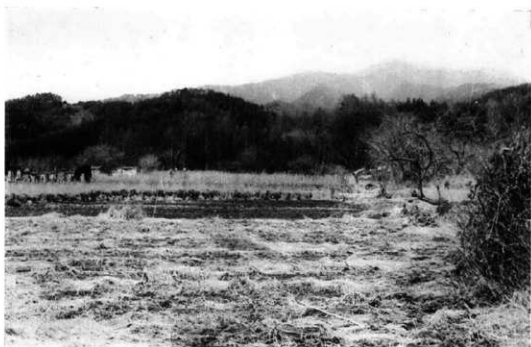
顔面把手はいままでに市内では数例しか発見されていない。有名なものとしては、月見松遺跡出土の縄文中期、顔面把手付大深鉢がある。これに次ぐものが、今回の第2号住居址のものと思われる。その大きさといい、姿、形といい、月見松遺跡出土のそれをまさっていると思われる。

石器は7点出土したが、縄文中期時代の住居址が2軒検出されたのに比較して少ない量である。石質で、緑泥岩や、硬砂岩の使用はおそらく、三峰川や天竜川系統のうちに属し、おそらく、下から西筑輪の地まではこんできたものと思われる。

天庄Ⅱ遺跡の報告書作製に当たって、県教育委員会文化課、関東農政局伊那西部水利事業所職員一同、調査団各先生、作業員各位に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

(飯塚政美)

圖 版



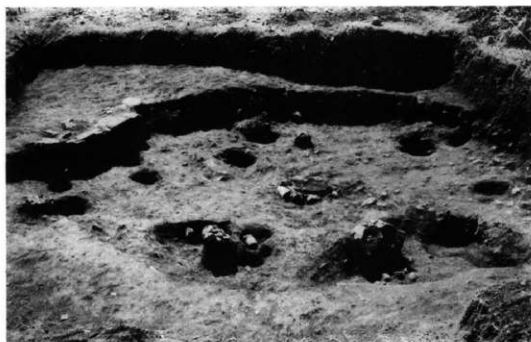
遺跡地遠景（東側より眺む）



遺跡地近景（南側より眺む）



第1号住居址



第2号住居址



第1号住居址埋炉址



第2号住居址埋炉上部



第1号住居址埋炉



第2号住居址埋炉断面



第1号住居址埋炉断面



顔面把手出土状況



土器出土状況



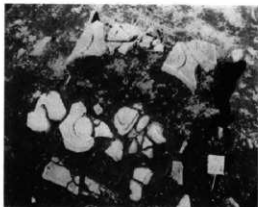
土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況



顔面把手表面（第2号住居址出土）



顔面把手裏面



土器（第1号住居址出土）



土器集中No 4（第2号住居址出土）



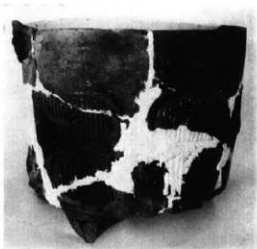
土器集中No 5（第2号住居址出土）



土器（第2号住居址出土）



土器埋理伊 (第2号住居址出土)



土器集No 6 (第2号住居址出土)



図版7 出土遺物

出土石器

天庄Ⅱ遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日 印刷

昭和55年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 株式会社 きょうせい
東京都新宿区西五軒町52

堀の内遺跡

目 次

目 次	(1)
挿図目次	(2)
図版目次	(2)
第I章 発掘調査の経過	(3)
第1節 発掘調査の経緯	(3)
第2節 調査の組織	(3)
第3節 発掘日誌	(4)
第II章 遺 構	(6)
第1節 建物址	(9)
第2節 第I区地層	(9)
第3節 城郭址と堀址	(11)
第III章 遺 物	(13)
第1節 土 器	(13)
第2節 把 手	(16)
第3節 石 器	(16)
第IV章 ま と め	(17)

插图目次

第1图	第I区遺構配置图	(6)
第2图	城郭址実測图	(7)
第3图	建物址実測图	(9)
第4图	第I区土層実測图	(10)
第5图	第I区土層実測图	(10)
第6图	掘址実測图及び断面图	(11)
第7图	土器実測图	(13)
第8图	土器実測图	(14)
第9图	土器拓影	(15)
第10图	把手実測图	(16)
第11图	石器実測图	(16)

图版目次

图版1	遺跡全景
图版2	遺構
图版3	遺構
图版4	遺構
图版5	遺構・土層及び遺物出土状況
图版6	出土遺物

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市においては、西箕輪、西春近地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡、昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鈴場遺跡の調査が行われてきた。本年度は宮垣外遺跡、天庄Ⅱ遺跡、瀬の内遺跡、小花岡遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和54年7月12日 県教育委員会より関指導主事が来伊し、予算査定をする。

昭和54年7月18日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをする。

昭和54年7月23日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをして、発掘承諾書をいただく。

昭和54年7月24日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第 2 節 調査の組織

瀬の内遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
〃	向山 辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北村 忠直	伊那市教育委員会前教育次長
〃	三沢 昭吾	〃 教育次長
〃	石倉 俊彦	〃 社会教育課長
〃	有賀 武	〃 〃 課長補佐
〃	米山 博章	〃 社会教育前係長
〃	武田 則昭	〃 社会教育係長
〃	沖村喜久江	〃 社会教育主事

発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会員
〃	御子榮泰正	〃
調 査 員	飯塚 政美	〃

調査員	福沢 幸一	長野県考古学会会員
〃	田畑 辰雄	〃
〃	小木曾 清	宮田村考古学友の会会長
〃	春日 徳明	大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年9月4日 テントを現場へ移し、第1区の南側の位置に建てる。堀の内遺跡の北側の桑畑一帯をI区と決める。テントができ次第、グリットを設定していく。グリットは1辺を2m×2mにしておく。グリット名は南、東の角をA1にて、東から西へA～C、南から北1～18とする。

昭和54年9月5日 第I区のA1から掘り始めていく。A5、B5附近から多量の土器片の出土をみた。これらの土器片は勝板式、加曾利E式、加曾利B式、晩期等々各種であった。A7からあとは層位が浅く、50～60cm位で山崩れの青ネバ層がみられた。夕方までかかってI区の設定したグリット全てに手をつけた。

昭和54年9月6日 第I区のA4、A5、A6、B4附近の多量の土器出土附近を拡張していく。拡張していくと、黒色土層面に多くの土器の出土がみられたので、そのレベルを主眼において拡張を進めていく。

昭和54年9月7日 昨日の黒色土層面を精査していくと、ところどころにかたい部分がみられた。聞くところによると、この附近に明治後半まで家があったことは事実であり、したがって、その当時の土間と考えられた。

昭和54年9月8日 本日は堀の内遺跡の城館のなかを2区としてグリットを設定した。グリットは南から北へA～Cと、

東から西へ1～8とする。さらに堀のセクションをとれるようにする。

昭和54年9月10日 堀のなかに設定したグリットの掘り下げを実施していく。遺物は相当量出土したが、遺構の存在は把握できなかった。耕土の深さは40～50cm位で、割合に浅く、しかも範囲が限られていたので、夕方までには、ほぼ完了する。堀はセクションをと



発掘風景

るように掘り下げ、ほぼ完掘を終了する。掘底より人骨や朝鮮キセルの出土があった。

昭和54年9月11日 本日は明治後半に移築したと思われる家の土間附近の清掃をして写真撮影をする。さらに、その平面、断面実測を終える。堀のセクションの清掃をして、写真撮影をする。城館址の全体的な地形測量を行う。

昭和54年9月12日 昨日、実施した明治時代後半に移築した家の土間の下を掘り下げてみると、多量の土器の出土はみられたが、遺構の存在ははっきりしなかった。堀のセクションを実測する。城館址の全体的な地形測量を行う。

昭和54年9月13日 明治時代後半に移築した家の土間の下を掘り下げていき、層位と土器の出土状態を確認してみる。城館址の全体的な地形測量を行う。本日をもって、堀の内遺跡の発掘を終了し、あとかたづけをする。

昭和55年1月～2月 遺物の整理、実測、図面の整理、図版の作製、実測図の作製、原稿執筆、報告書の作製及び編集、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書の刊行

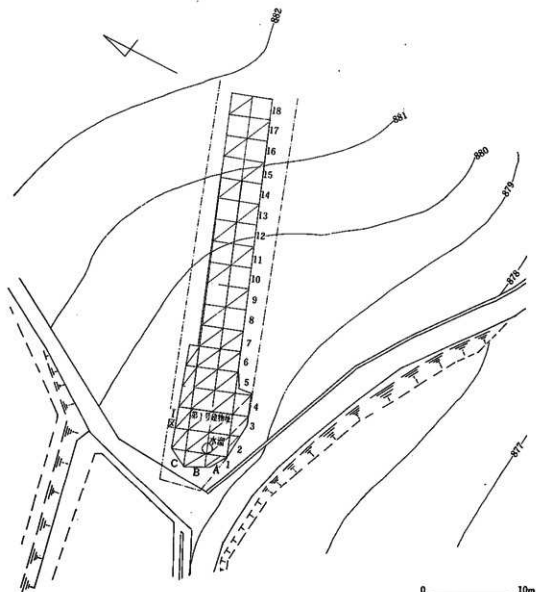
(飯塚政美)

作業員名簿

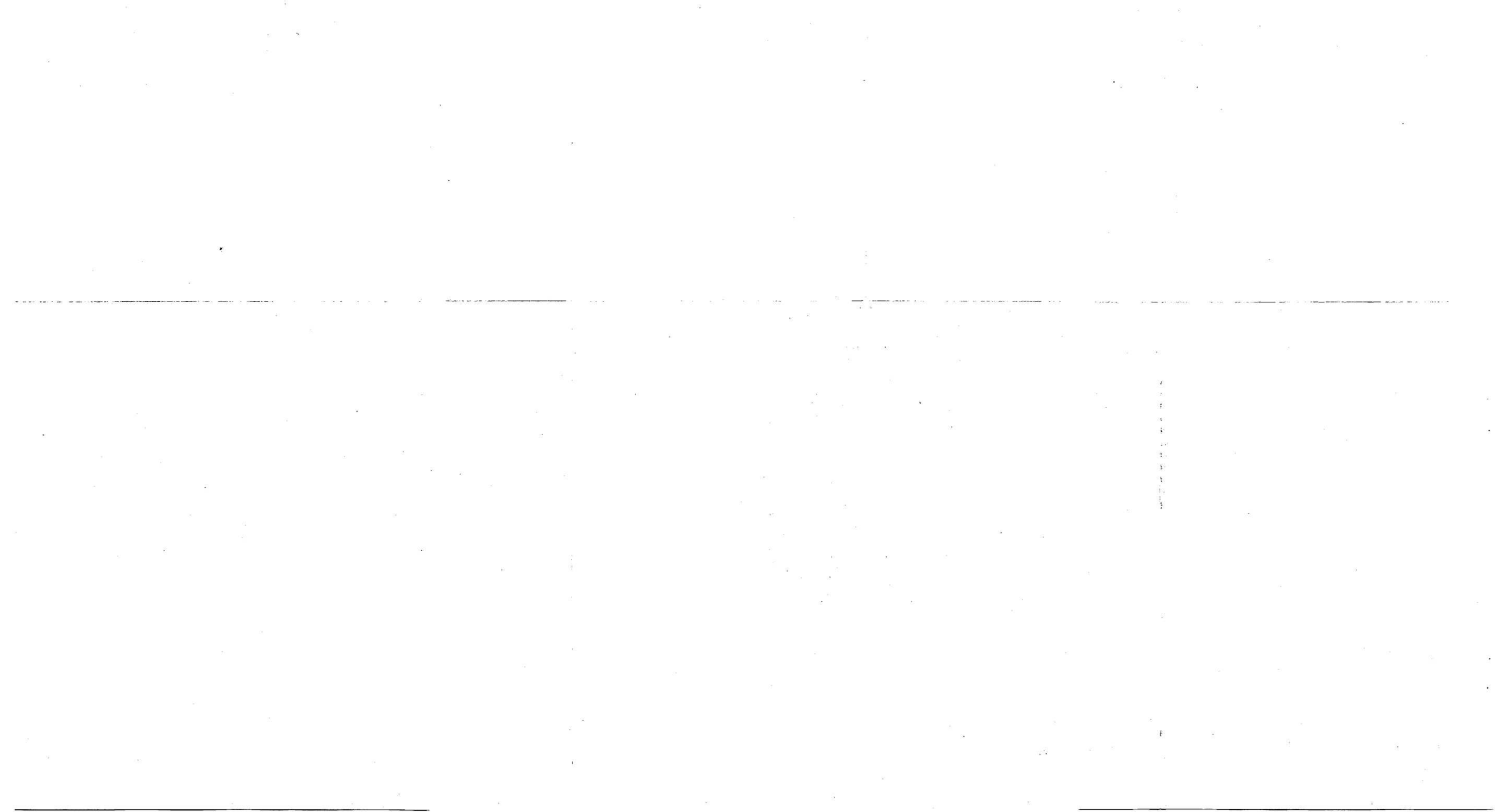
平沢公夫、池上大二、赤羽幸寿、唐木馨、原修一、後藤重美、登内政光、大野田三千代、小池八重子、中村美さを、平沢八千子、小田切房子、保科徳子、白鳥あき子、井口はる子、酒井とし子

(敬務略 順不同)

第Ⅱ章 遺 構



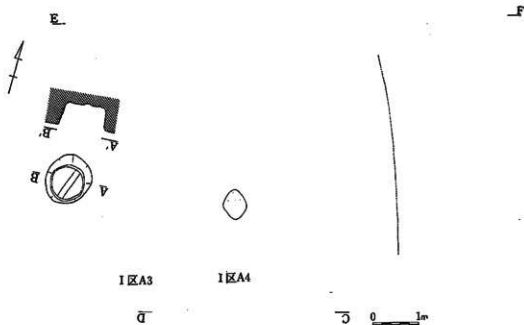
第1区 第1区遺構配置圖



第1節 建物址 (第3図, 図版2)

本遺構は第I区A2~A6, B2~B6, C2~C6のグリット附近の範囲内に広がっており、発掘ができる用地内は帯状に細長くなっているために、その規模は不明であった。ただ、掘っていく段階で、黒褐色土層面中にかたい面が、検出された。附近の古老に聞いてみるに、このところ江戸時代の終わるところから明治時代に民家があったと聞いた。本遺構は当然、土台石で基礎を成していたと思われるが、それは検出されなかった。前述したかたい面は土間的なものと思われる。A4からB4にかけて焼土の堆積がみられた。南側のB2附近に南北1m10cm, 東西1m位の円形状の落ち込みがみられた。掘り下げていくと、壁面はくずれないように粘土でつきかためてあった。底面は大較平坦で、かたく、円周に沿って木桶を埋めたと思われる数cmの溝状の落ち込みがみられ、さらに南北に木桶の底に移動しないようにつけた木板の跡がみつかった。これらの溝状のなかから木片の破片がみられた。この遺構は位置、あるいは状態からして、溜桶的な用途をなしていたものと思われる。遺物の出土は何もなかった。

(飯塚政美)

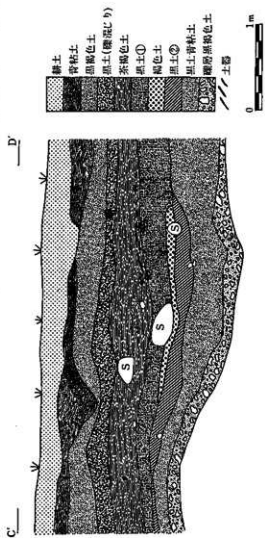


第3図 建物址実測図

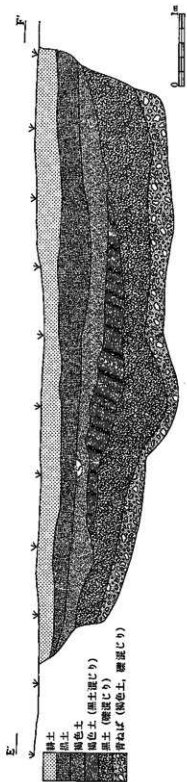
第2節 第I区地層 (第4~5図, 図版5)

第4~5図はI区の地層図で、第3図と照合してみてもらいたい。山麓地帯なので堆積層序が複雑で、かつ何層にも及んでいる。これらの層の間に土器片がサンドイッチ状に走り込んでいた。

(飯塚政美)



第4図 第I区土層実測図



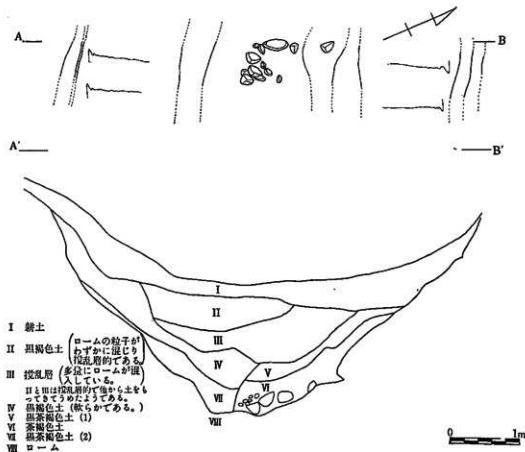
第5図 第I区土層実測図

第3節 城郭址と堀址 (第2, 6図, 図版3~4)

本城郭の存在する地形的な状態は次のようである。経ヶ岳山系に連なる山麓扇状地の扇頂部にあたり、標高は858.6m~891m位のうちに位置している。等高線でみればすぐわかるように、一般的な地形はわずかな角度で西から東へ傾斜している。形態は平山城であろう。

西側の外郭部(第2図の断面E・Fの西側をさす。)と東側の内郭部は一つの大きな堀によって区別されている。外郭部の規模は南北約100m, 東西約162m, 比高差20.4m程, 内郭部の規模は南北約115m, 東西約94m, 比高差12mをそれぞれ測定できる。

外郭部と内郭部の境界線上に南北に長さ約48m, 高さ約1.3mの土塁が構築してあった。外内郭部ともに、現況は、山林や畑に利用されている。ところどころに両郭とも、段が数段にわたってみられるが、これは、かつて畑作用に利用されたものか、直接城郭に関係した遺構かは現在のところでは判然としない。おそらく、全面的な発掘調査を実施したならば、この問題はある程度は解明できると思われる。



第6図 堀址実測図及び断面図

掘址は人工的なものと、自然の沢を利用したのと二つに大別できる。外郭部に連なる掘址は城郭の最西端は北側の堀と、南側の自然の沢と連結している。南側の沢は幅約22m、深さ約9mを測定でき、急傾斜の段丘崖を形成している。北側の堀は幅5m50cm、深さ3m20cmを測定できる（現況は埋まってしまっていてその規模は用地内で掘址の発掘を行った部分の数値をもとにしている。）。この発掘した部分の地層は第6区掘址実測図及び断面図により、上から耕土、黒褐色土、攪乱層、黒褐色土、黒茶褐色土（1）、茶褐色土、黒褐色土（2）の層序で堆積していた。掘り込み面はローム層であり、上部はソフトローム層、下部はハードローム層の様相を呈していた。この掘址は先に述べた連結部から東西に約160m位続き、外郭と内郭の境界を成す堀へと続いている。この掘址は勾配からして、さきの連結部より最初の水を取り入れて、流し掘りにし、あとで手を入れて、かっこうをよくしたものと思われる。

両郭の境界を成す掘址は南から北への傾斜があり、これも最初は南側の沢をとめて、水を取り入れ、流し掘りにしたものと思われる。規模は埋まってしまっていて、はっきりした構築時の数値は把握できないが、現況では長さ約60m、平均幅約9m、深さ約3mを測定できる。

南側の沢は先に述べた連結部より東へ約160m程流れると両郭境界の堀に至る。この付近は幅約31m、深さ約10m程を測る。さらに東流して約90m程行くと、鍵の手に北へ流れる。この付近の幅約6～7m、深さ約2.5mを測る。北流して約36mほど行くと、鍵の手に東へ続く。この状態は現在では自然の小さな沢ではあるが、城郭址の堀に利用するために、わざと、川筋を曲げたものと思われる。自然の川にしては、このような曲折の仕方はまずありえないと思われる。

北側の沢は幅約10m、深さ約3～4m程を測る。この沢の西側は両郭境界の堀と接し、東へ流れて、西宮輪中条公民館の南側で、南側の沢と一緒に流れている。

篠田徳登氏『伊那の古城』によれば、『中条公民館の右裏手を上手村、左手を垣外村、下手を下村と呼んでいる。この城館址は上手村と垣外村にはさまれたところに位置して構築されている。南側の川はしろの堀と言っている。この川は氾濫すると見えて、砂防ダムや保安林がみられる。城の内郭部を中垣外、外郭部をあしだやしきと言っている。中垣外は現在は桑畑や松林に利用されている。』

今回の発掘は部分的であったので城郭址に関連する遺物の出土は何もなかったが、全面発掘をしたならば、遺物の出土があると思われる。中垣外という小字名からして、城郭址の居館の中心部はこの地と思われる。

最後に、この城郭址の測量に地主側の立場から御協力下さった東京都大田区在住小阪^{ひさお}秀氏に厚く感謝する次第であります。

（飯塚政美）

第三章 遺 物

第1節 土 器 (第7~9図, 図版3~4)

第7図の土器は第I区A3より出土した。胴部上半と口縁部は欠損しているので、器高は不明である。底径は6.7cmを測定できる。文様はLR縄文を斜目に施し、その上に沈線を一部では弧状、また一部では方形に配してある。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土に少量の雲母を含む。

本土器は加曾利E期に属していると思われる。

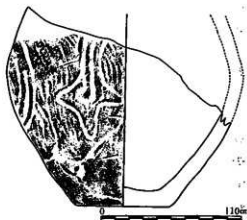
第8図の1は第I区A3のグリッドで出土した土器である。口縁径は31cm、器高、最大径、底径は下部が大部分欠損しているので不明である。器厚は10cm内外を測定できる。器形は現存する部分より察して、胴部にふくらみを有する平縁口縁の深鉢型土器である。

口縁上部の文様は大股等間隔に隆線による渦巻文を口唇部に向かって半円形に配し、結末は口唇部よりやや上につき出ている。隆線によって囲まれた中に刻目をつけてある。口縁中央部の文様は半円形に配した文様から下に向かって粘土紐を斜目状に、左右対称状に、長円形に配し、その結末は胴部上部にまで達する。胴部上部の文様は粘土紐を横位に貼りつけ、その間に刻目をつけてある。口縁から胴部にかけての主体文様は半割竹管による沈線を縦横、斜目状に不規則に配してある。

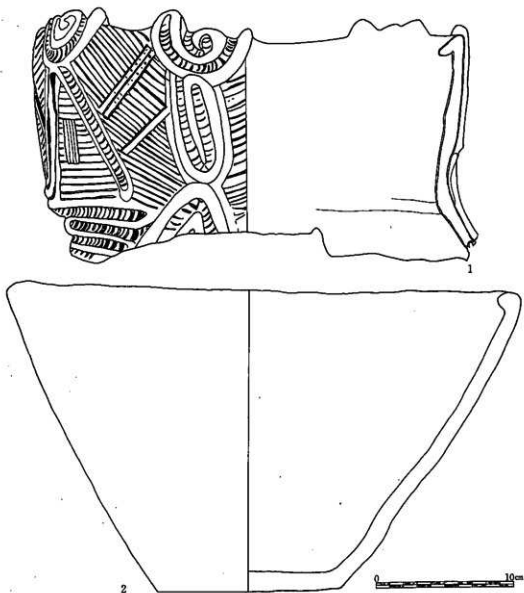
焼成は良好で、少量の長石を含む、茶褐色を呈する。本土器は縄文中期後葉の前半、つまり加曾利E期の古い方に属すると思われる。

第8図の2は第I区A4より出土した土器である。口縁径は37cm、器高は21.6cm、底径13.4cm、器厚は1.1cm内外を測定できる。文様は外面全て無文である。口縁部がわずかに内反する平縁口縁浅鉢型土器である。焼成は普通で、胎土に長石粒を含む、黄褐色を呈する。

第9図の土器拓影を説明する。(1)は胎土に多量の繊維を含んでいる。文様は無文である。縄文早期末葉に位置づけられよう。(2~3)は縄文前期に位置づけられるもの、(2)は荒い縄文の上に細い粘土紐を貼り付けその上に大きな爪形文を配してある。(3)は斜縄文や横位の縄文が入っている。(2)は北白川下層式と思われる。(4)は平出3A式と呼ばれている土器で、沈線が横位や縦位に施してある。(5)は沈線と刻目が顕著にみられるもの。(6)は、(4)と文様は類似しているが、ただ、破片上部に槽円状に隆起文がみられる。(7)は低い隆帯が走り、その隆帯沿いに刻目がみられる。(8~9)は高い隆線がみられ、その上に刻目のつけてあるもの。(8)は樽形文状になっている。(5~9)は縄文中期中葉に位置づけられると思われる。一般的に言われている勝坂式



第7図 土器実測図



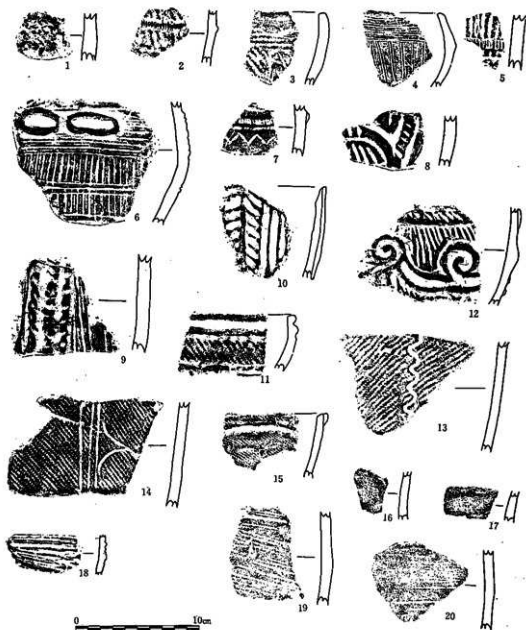
第8図 土器実測図

の一派であろう。(10)は細い粘土紐を縦位に貼り付け、それらの間をはしご状に横位につけてある。これは加曾利E期の古い方に位置づけられると思われる。

(12)は粘土紐を渦巻状につけてあるもの、(13~14)は縄文地に懸垂文のみられるもの、(13)は懸垂文が蛇行状に、(14)はそれが直線状に走っている。(11~14)は加曾利E期の土器と思われる。(15)は磨消縄文的手法のみられるもの。(16~17)は無文であるが、焼成は極めて良好であって、胎土もち密である。(18~20)は条痕文土器といわれている一派である。条痕のなかでも

(18)は割合に粗い。(16~17)は縄文晩期のなかでも古い方に属し、(18~20)は縄文晩期の新しい方に位置づけられると思われる。以上、縄文土器を拓影によって述べてきたが全般的にみて縄文早期末葉から縄文前期、縄文中期、縄文後期、縄文晩期と各時期にわたって出土していることがわかった。さらに北白川下層式のように関西系土器の出土は東西文化交流の上で重大な問題点を提供してくれた。

(飯塚政美)



第9図 土器拓影

第2節 把 手 (第10図, 図版6)

本遺物は第Ⅰ区B5より出土した。全体的な形はどれもハ虫類の一種であるトカゲの頭を抽象化して形造したものと思われる。

口先の上アゴは若干丸味を呈し、下アゴは欠損している。目の部分は一段高くしてあり、特にまなこは中空円形竹管によって押しつけて施文したように思われる。頭部全体のほぼ中央部に隆帯を貼り付けて、その上に蛇行状の刻目を配してあり、全体的にみるとトサカのようなものと思われる。



第10図 把手実測図

色調は黒褐色を呈し、焼成は中位である。胎土中には多量の長石を含んでいる。期的には把手の隆盛する勝坂式の一系に含まれるものと思われる。

(飯塚政美)

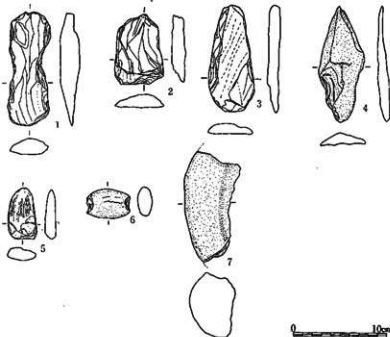
第3節 石 器 (第11図, 図版6)

今回の発掘で出土した石器の総数は7点である。(1~4)はグリット内から出土したもので、全て打製石斧に属していると思われる。石質は、(1, 2, 4)は緑泥岩、(3)は泥岩を用いてある。1は分銅型、(2~3)は下部がわずかに開く撥形、(4)は不整形を呈している。(1~3)の剝離調整は丁寧であるが(4)は粗雑な姿であった。

(5)はグリット内の出土で、緑泥岩の小型磨製石斧である。刃部や剝離の調整は丁寧に全面に及んでいた。

(6)はグリット内の出土で、硬砂岩を利用し、両端を打ち欠いて凹みを入れた石錘である。欠いた部分は丁寧に剝離を入れて使用がうまくできるようにしてある。重さは25gを測る。

(7)はグリット内出土で、安山岩を利用した石皿の破片で、大部分は欠損してしまっているので、大きさや、中央部の凹みの大きさや深さは不明である。



第11図 石器実測図

(飯塚政美)

第Ⅳ章 ま と め

堀の内遺跡を考える場合、そのなかにある中城の居館址についての歴史的背景を考えてみなければならない。篠田徳登氏の『伊那の古城』によれば、次のようになる。『中条氏は郡記、古系によると、天文元年（1532）に上杉定実の家臣、唐沢隼人源ノ昌綱という人がこの地に居館を構えた。その子唐沢備前義景の代に、飯島町石曾根に移った。弘治2年（1556）武田信玄伊那侵入の際に、父子ともども、領地没収にあった。』なお、飯島町石曾根に館を構えた所は現在「唐沢城」と呼ばれ、昭和49年度飯島町教育委員会で発掘調査を実施し、現在報告書が刊行されている。

南信伊那史料（伊那武蔵権元記）によれば『中条氏は応永8年（1401）、この村に来たりて居を構え在名をもって家名として代々これに住む。初代は笠原中務少輔、弟左近進信政。次が中条新左エ門信度。左馬の助信辰。左近進信政に至り、中条のハツ手のうちにて百五十貫文を領して住むと。この時高遠の仁科五郎盛信に属していたが天正10年織田の高遠討入の時防戦に加わったが遂に利あらずして討死し、家名を失ってしまった。その長子八郎は民間に降ると』と記してある。

以上歴史的背景を文献によって述べてきたが、今度は部分的ではあるが、実際に発掘した成果に基づいて考察してみよう。城郭址の規模及び城郭址に関係した遺構等々については本文中第Ⅱ章、第3節城郭址と堀址に詳細に述べておいたので、今回は割愛させていただく。全般的にみて、第6図堀址実測図及び断面図より、堀は箱薬研的な形態を成しており、堀の変遷からみて、室町中期以降と考えられる。全面的な発掘調査が可能であったならば確実なる時代決定のできる遺物が出土したと思われるが、一部分だけであったので、何も遺物の出土しなかったことはおしまれる点である。

第Ⅰ区より検出された建物址は近世から近代へ至る民家であったろうと思われる。日一日と近代的な家が建てられ、今は忘れさられようとしている民家がこのような状態で出土したことは、今後の研究に大きなプラスとなると思う。

第Ⅰ区地層内から土器が層状に出土した点を考えてみると、次の二つの問題提起ができると思う。第一として、遺跡地の地形が西から東への傾斜が強い。また、地層の層序が山麓の押し出しによる可能性が強く考えられる。これらを総じてみると、土器流入説。第二として、出土状態から見て、流入にはあまりにも重さなりのしかたが見事である点、さらに土器片には流れてきたような磨耗の跡がみられない点、以上をもとに考えてみると、土器捨場説。

以上二つの説が考えられたが、諸条件を顧みて、後者の土器捨場説が最も妥当な線に落ち着くものと思われる。この付近で出土した土器は縄文早期末葉、縄文前期、縄文中期、縄文後期、縄文晩期の各時期にわたっており、全ての時期に利用されたものと思われる。

（飯塚政美）

图 版



遺跡地を北側より眺む（林の中が城址）



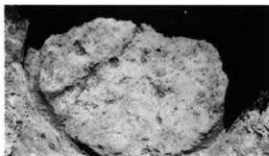
遺跡地近景（1区を南側より眺む）



近世の建物址



便所の溜桶の全景



便所の溜桶を上から見た状態



城の本郭部（西より眺む）



城の本郭部（東より眺む）



堀址（東西に縦状に走る）



堀址（南北に横状に走る）



I区土層状況



堀址の断面



土器出土状況



土器出土状況



土器出土状況

図版5 遺構・土層及び遺物出土状況



出土土器



出土土器



出土土器



把手



出土石器

図版 6 出土遺物

堀の内遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日 印刷

昭和55年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 株式会社 ぎょうせい
東京都新宿区西五軒町52

小花岡遺跡

目 次

目 次	(1)
挿図目次	(2)
図版目次	(2)
第I章 発掘調査の経過	(3)
第1節 発掘調査の経緯	(3)
第2節 調査の組織	(3)
第3節 発掘日誌	(4)
第II章 遺 構	(6)
第1節 住居址	(6)
第2節 土 坎	(9)
第III章 遺 物	(10)
第1節 土 器	(10)
第2節 石 器	(13)
第IV章 まとめ	(14)

挿 図 目 次

第1図	地形及び遺構配置図	(7)
第2図	第1号住居址実測図	(6)
第3図	第1号土坑実測図	(9)
第4図	第2号土坑実測図	(9)
第5図	土層実測図	(10)
第6図	土器実測図	(10)
第7図	土器実測図	(11)
第8図	土器拓影	(12)
第9図	石器実測図	(13)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺 構
図版3	遺構及び遺物出土状況
図版4	出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに附設する計画が実施される運びとなった。伊那市においては、西箕輪、西春近地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡、昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鉢場遺跡の調査が行われてきた。本年度は宮垣外遺跡、天庄Ⅱ遺跡、堀の内遺跡、小花岡遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和54年7月12日 県教育委員会より関指導主事が来伊し、予算査定をする。

昭和54年7月18日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをする。

昭和54年7月23日 西箕輪中条中条公民館にて地主との話し合いをして、発掘承諾書をいただく。

昭和54年7月24日、伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

小花岡遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
"	向山 辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	北村 昭直	伊那市教育委員会前教育次長
"	三沢 省吾	" 教育次長
"	石倉 俊彦	" 社会教育課長
"	有賀 武	" " 課長補佐
"	米山 博章	" 社会教育前係長
"	武田 則昭	" 社会教育係長
"	沖村喜久江	" 社会教育主事

発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴泰正	"
調 査 員	飯塚 政美	"

調査員	福沢 幸一	長野県考古学会会員
＃	田畑 辰雄	＃
＃	小木曾 清	宮田村考古学友の会会長
＃	春日 徳明	大正大学学生

第3節 発掘日誌

昭和54年8月18日 朝、現場へ集合し、グリットを設定し、北側はⅠ区、南側はⅡ区と決め、グリットは北から南Ⅰ～23、東から西へA～C、と決める。雨降りとなってきたので、午前10時をもって終了する。

昭和54年8月20日 それぞれのグリットを掘り下げていくと、数カ所にわたって落ち込みがみられたが、果たして、これが遺構になるかはまだ判然とせず、その正体は不明である。

昭和54年8月21日 時々、雨が降ったが、グリット掘りをそのままつづけていく。昨日の遺構となりそうなところは雨のためにそのままにしておく。

昭和54年8月22日 台風の影響により、毎日雨が降ったり、やんだりしたが、昨日に引続いて、グリット掘りを南へ南へと押ししていく。

昭和54年8月23日 グリット掘りを実施したところで、セクションがとれるように断面をきれいにする。

昭和54年8月24日 遺構になりそうなところを第1号土坎とし、また、その南側を第1号住居址と名をつけて掘り下げをつづけていく。第1号土坎はロームマウンドを伴うものとなり、なかから縄文中期土器片の出土をみた。第1号土坎のセクションをとる。

昭和54年8月25日 第1号土坎のセクションをとって掘り下げをつづけていく。同様に第1号住居址の掘り下げもつづけていく。

昭和54年8月27日 第1号土坎の平面、断面実測を終了する。地層図を作製する。第1号住居址の掘り下げをつづけていく。



昭和54年8月28日 第

発掘風景

1号住居址の完掘をし、その清掃をし、午後、写真撮影を済ませる。ひろげた段階で、東側の境界近くに新道式の土器が伏せて出土した。

昭和54年8月29日 テントをつくってあった用地の北側の方にグリットを設けて掘り進めていくと、ローママウンドを伴う土塚が見つかり、第2号土塚とする。全員を投入して、そのプラン確認につとめる。

昭和54年8月30日 プラン確認をして、掘り始めてみると、ローママウンドは東側にあり、そのすぐ西側に落ち込み状の掘り込みが発見された。面積があまりなかったので、夕方までには完掘できえた。

昭和54年8月31日 現場のあとかたづけをして、テントをとりこわして、一応、本日で小花岡遺跡の現場を終了する。第2号土塚の清掃、写真撮影を終える。平面、断面の両実測終了、全測図の作製

昭和55年1月～2月 遺物の整理、遺構・遺物の図面整理、報告書原稿執筆、報告書の作製、報告書を印刷所へ送る。

昭和55年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

作業員名簿

平沢公夫、池上大二、赤羽幸寿、唐木馨、原修一、後藤重美、登内政光、大野田三千代、小池八重子、中村美さを、平沢八千子、小田切房子、保科徳子、白鳥あき子、井口はる子、酒井とし子、有賀鬼久雄、小池亘、工藤りよ子、飯塚真佐志、田中真弓、小沢邦彦、北原浩彦

(敬称略 順不同)

第Ⅱ章 遺 構

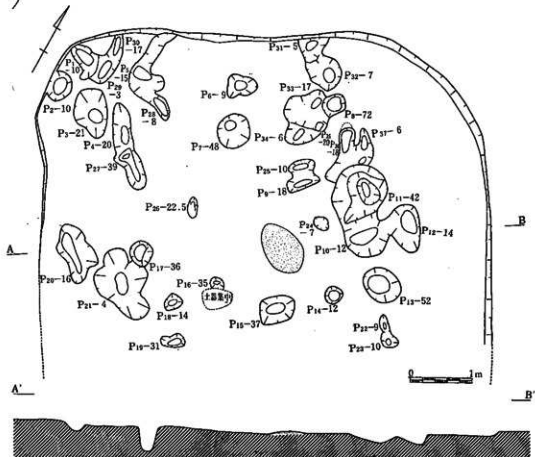
第1節 住 居 址

第1号住居址 (第2図, 図版2)

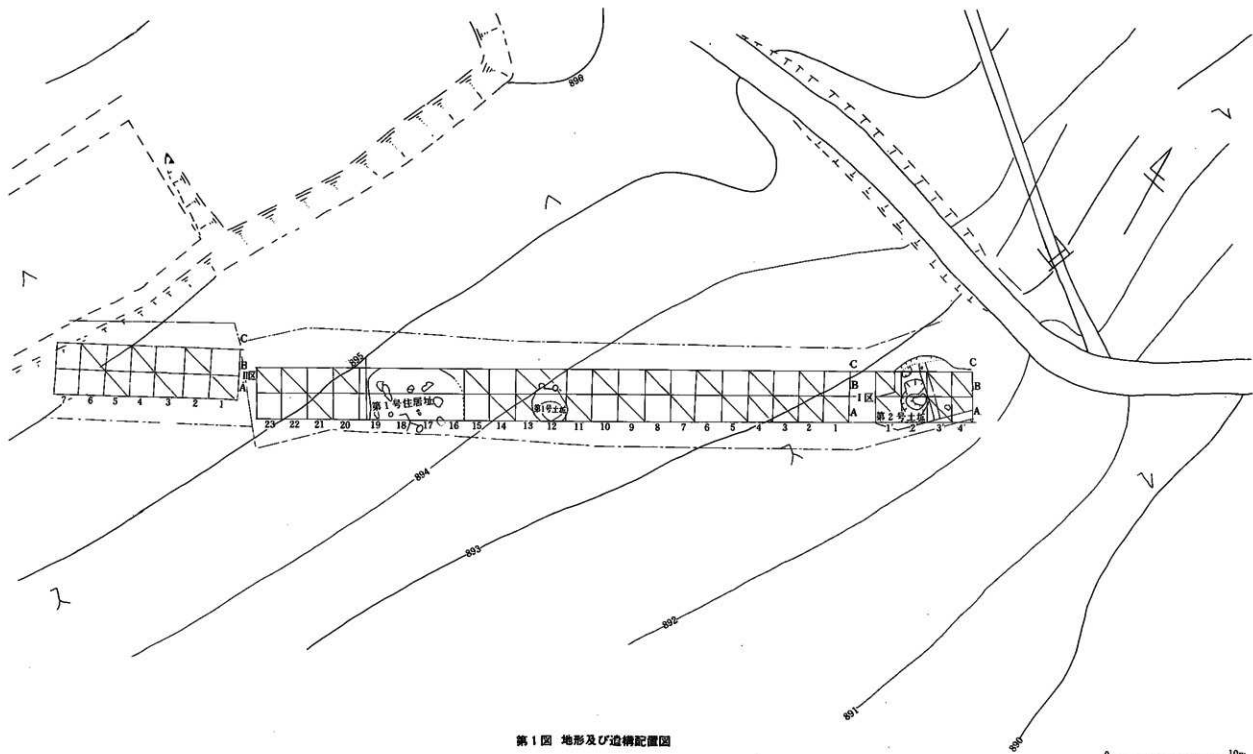
本址は発掘地区の南の位置に発見され、表土面より65cm位下ったローム層を掘り込んで構築してある。平面プランは南側が用地外のために発掘調査は不可能であるが、想像するに円形状を成すと思われる。規模は南北は不明であるが、東西は7m程度であった。壁高は浅くて10cm内外であった。壁面は全般的に軟弱で、凹凸が著しい。

床面は一部分でかたいところはあったが、全般的には軟弱であった。炉は中央部附近に焼土が発見され、地床炉と思われる。ピットは多数発見されたが主柱穴となりそうなのは深いものがそうだと思われる。

遺物は南側の方に土器一個体分がびしゃっとつぶれるような状態で出土した。この土器より本址は縄文中期中葉のはじめごろと思われる。新道式と思われる。



第2図 第1号住居址実測図



第1図 地形及び道構配置図

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

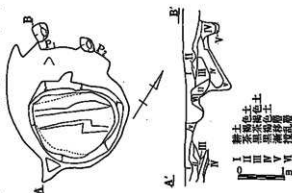
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

第2節 土 城

第1号土城 (第3図, 図版2)

本土城は第1号住居址に近接して、ルーム層を掘り込んで築いてある。土城に北、西、南へと回っており、それが、いわば溝状になっている。土城状になっているうちでも北側の規模は南北75cm、東西2m20cmで、すりばち状に落ち込み、壁面は軟弱で凹凸が顕著であった。西側の規模は南北2m50cm、東西45cmほどで、細長く、すりばち状に落ち込み、壁面は軟弱で、凹凸が顕著であった。床面はすりばち状になり、かたく、凹凸が顕著であった。南東の一角に南北1m80cm、東西2m10cmほどの規模で、ルーム層をマウンド状に構築してあり、いわばルームマウンドを伴う土城と思われる。

遺物は土城のなかから縄文中期後半の土器片がかたまつて出土し、したがって、本土城は同期のものと思われる。

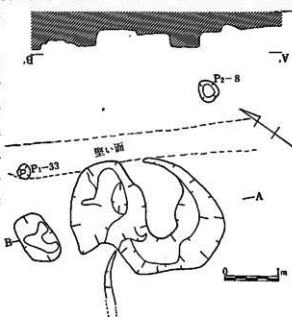


第3図 第1号土城実測図

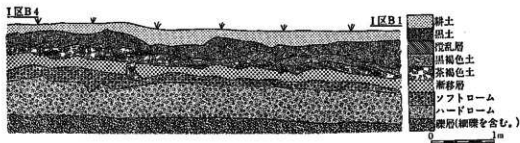
第2号土城 (第4図, 図版3)

本土城は発掘地区の北側の方に検出された。表土面より80cm位下ったルーム層面を掘り込んで構築してあり、平面プランは不整形形状を成している。その規模は南北1m50cm、東西85cmほどを成している。壁高は10~20cm前後であり、西側はその状態が内気味、東側は外気味、南、北は垂直に近かった。壁面は軟弱気味で凹凸がはげしい。

床面はルーム層でかたくなっており、凹凸が顕著であった。本土城もルームマウンドをもった土城であった。北側のルーム層面での堅い面は何か遺構の匂いを漂わせたが、その実体は不明である。遺物の出土は何もみられず、したがって、時期不明である。この床面は本遺構とは直接的に関係なく、別遺構のものと思われる。



第4図 第2号土城実測図

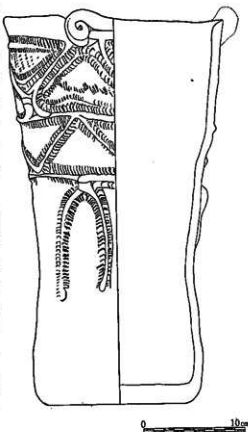


第5図 土層実測図

第Ⅲ章 遺 物

第1節 土 器 (第6～8図, 図版3～4)

第6図の土器は第1号住居址の床面上より10cm位浮いた高さに、つぶれるような状態で出土した。口縁径は21.6cm、器高は37.7cm、最大径は21.6cm、器厚は0.8cm内外、底径は13.8cmをそれぞれ測定できる。器形は口縁は平縁で、口唇部は若干、内側へそがれている。胴部は若干、つぼまり気味、底部はややふくらみ気味である。全体的には円筒形状に近い深鉢型土器である。口縁上部の文様は口唇部に密着して渦巻状の突起をつけ、他は無文帯が見られる。口縁下部は隆線による三日月状の区画を構成し、隆線の縁、区画のなかに一部は刻目、一部は爪形文様風に文様を配し、意匠的效果を上げている。胴部上部の文様は隆線による区画文を三角形状に配し、それらのなかに爪形文を配してある。胴下部は隆線の一部では、こぶ状、楕円形状に垂下させ、それらに爪形文をつけてある。底部は無文が主体をなしている。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は長石、石英をかなり含んでいる。本土器は関東の阿玉台式、信州の新道式に併行するものと思われる。



第6図 土器実測図

第7図の土器は第1号住居址の床面上より約30cm位浮いた面に出土した土器である。口縁部は欠損しているので、器高は不明である。底径は19cmであり、器厚は8cm内外を測定できる。この図に記載してある部分は縄文中期中葉に見られるカップ型土器の器台の部分と思われる。器台の底径12.8cm、高さは10.6cmを測定できる。器台の底部近くに若干、内側へ折れ曲がっている。



第7図 土器実測図

焼成は部分的に良好と普通とが区別できた。胎土は多量の長石、雲母、石英を含む。壁面にそれらの含有物が露出している。

色調は茶褐色の部分と、赤味を帯びている面とが歴然としていた。出土した住居址からして、第6図の土器と編年的に一致する時期と思われる。

第8図の(1~3)は第1号土坑内より出土した土器である。1は壁面にわずかに細線が走っている。(2~3)は無文ではあるが、おそらくこの3片は同一個体と思われる。焼成は普通である。色調は黒褐色を呈し、3片とも外面に多量の炭化物の附着がみられた。胎土には多くの長石や石英を含んでいた。縄文中期後葉に位置づけられる。

(4~20)は遺構外のグリットから出土した土器は一応、編年的に、あるいは文様別に分類して記載した。(4)は細かな斜縄文の間にC字状の爪形文を配してある。破片から察する文様の配列は爪形文、縄文、爪形文と交互に配列されているようである。焼成は良好、色調は茶褐色、胎土に多量の長石を含む。縄文中期前半に位置づけられると思われる。

(5~8)は隆帯や沈線の発達が著しい土器を集めた一群である。(5~6)は隆帯が見事であり、(7~8)は沈線が鋭く、深くなっている。色調は(5~6)は赤褐色、(7)は黄褐色、(8)は黒褐色を呈している。焼成は(5~8)は不良、(6~7)は良好である。胎土は(5, 8)は多量の雲母を含んでいる。(9)は器面全体を荒い縄文が見られる。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は普通である。(10~13)は楕形文の発達が見られる土器のあつまりである。楕形文の区画を成す一部が隆線になっているのは(10, 12~13)、沈線になっているのが(11)である。

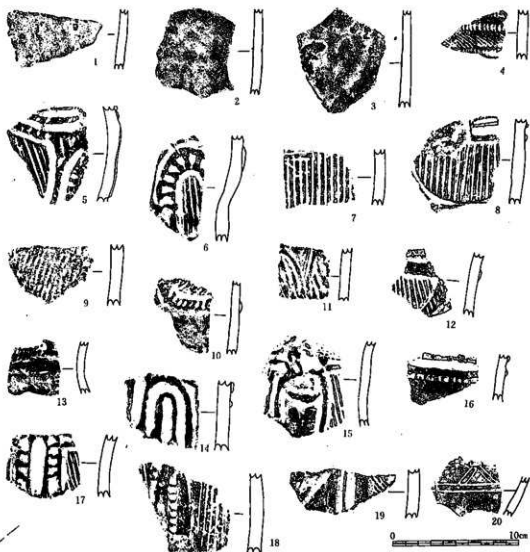
(10)は赤黄褐色、(11~12)は明黄褐色、(13)は赤褐色を呈していた。焼成は(10, 13)は普通、(11~12)は不良であった。胎土は4破片全て、少量の長石を含んでいた。(5~13)は縄文中期中葉に含まれると思われる。

(14~18)は粘土紐の発達が著しいもの。粘土紐の発達を細かに観察してみると何種類かに分類できる。単純な粘土紐だけのもの(14)、粘土紐が横位に見られ、その間に爪形文を配してあるもの(16)、粘土紐が太く、縦位にあり、それによって区画されたなかに刻目のあるもの(18)、粘土紐が細く、複雑多岐にみられるもの(15)、粘土紐が細く、縦位に走り、はしご状にそれを貼りつけてあるもの(17)。(14)は明黄褐色、(15, 17)は黒褐色、(16)は茶褐色、(18)は赤褐色を呈している。焼成は(14)は良好、(15~18)は普通である。(18)の内面には黒々と多量の炭化物の附着がみられた。胎土は(14~17)では多量の長石を、(18)は多量の雲母を含んでいた。

(19)は破片外面の両側に斜縄文を配し、これらの縄文帯にはさまれて縦位に隆起状、沈線状の懸垂文が走っている。黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に多量の長石や雲母を含む。(14~19)は縄文中期後葉に位置づけられると思われる。

(20)は破片上部には無文地に細い沈線を二本ずつ平行に山形状に配し、中央部では同様に二本の沈線を横位に走らせている。これらの文様が大股中央部で連結するようになっている。この破片は縄文後期中葉ごろと思われる。

(飯塚政美)



第8圖 土器拓影

第2節 石 器 (第9図, 図版4)

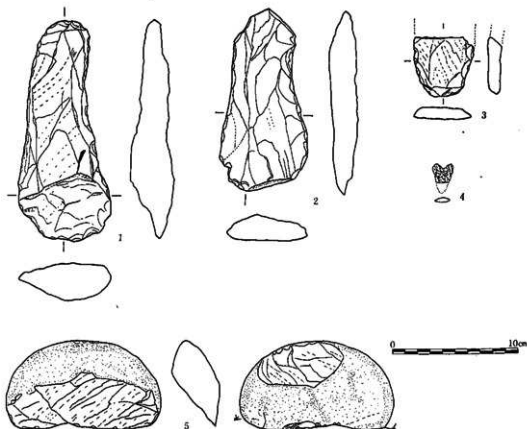
今回の発掘で出土した石器の総数は全部で5点である。打製石斧 (第9図 (1~2))はともに硬砂岩であり、楕円形を呈し、調整を丁寧にしてある。ともにグリット内より出土している。

(3)は第1号住居址より出土した打製石斧であり、石質は硬砂岩、上部は欠損しているが、調整は割合に良好である。短冊形を成している。

(4)はグリット内より出土した黒曜石製の打製石鏃で、有脚鏃に属し、先端部は欠損しているものの調整は良好である。

(5)はグリット内より出土した硬砂岩製の横刃形石器である。下端部に剝離を加え、刃部をつくっている。側面の一部に使用痕の跡がみられる。

(飯塚政美)



第9図 石器実測図

第Ⅳ章 ま と め

小花岡遺跡は縄文時代の遺跡であって、西部送水管路線予定地はその遺跡中央部を横切っており、そのなかに縄文時代の竪穴住居址1軒と、マウンドを伴う土塚2基が発見された。

住居址は縄文中期中葉ごろのものである。その全体的な状況は東側が用地外のために不明であった。したがって、その詳細なことについては不明であった。

土塚についても、二つともロームマウンドを持っていた。全般的な地形を考えてみるに、土塚の存在した面はかなりの傾斜地であったのが、人為的なものか、自然的なものかは疑問が残る。ただ、第1号土塚は土器出土状態からして人為的な可能性が強い。

土器については前で細かに述べてあるので第8図の土器拓影に基づいて、編年的に述べてみようと思う。

第8図(1～3)は加曾利E式、(4)は晴ヶ峯系統、(5～13)は勝坂式、(14～19)は加曾利E式、(20)は加曾利B式であろう。

石器は5点出土したが、今回の西箕輪地区4遺跡のうちでは唯一の石織の出土がみられた。

最後に炎天下のもとに発掘調査に御協力下さった関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一同、調査団の諸先生、作業員各皆様方に深甚なる感謝を致します。

この報告書が今後考古学研究に役だつことを念じて、まとめとする。

(飯塚政美)

图 版



遺跡地遠景(南側より眺む)



遺跡地近景(北側より眺む)

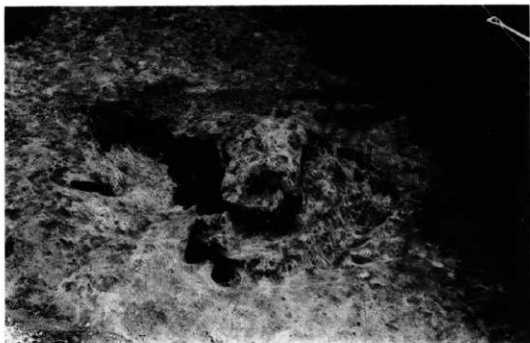
図版1 遺跡全景



第1号住居址



第1号土坑



第2号土坑

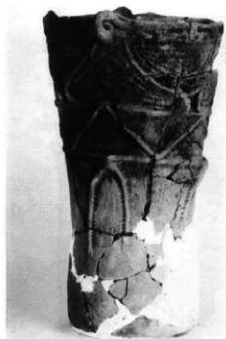


土器出土状況（第1号住居址出土）



土器出土状況（第1号住居址出土）

図版3 遺構及び遺物出土状況



土器（第1号住居址出土）



土器（第1号住居址出土）



出土石器

小花岡遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月15日 印刷

昭和55年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 株式会社 きょうせい
東京都新宿区西五軒町52

伊那市史編纂委員会

